
学園黙示録と古しえの鉄の巨人

ガンダムマイスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録と古しえの鉄の巨人

【Nコード】

N2048W

【作者名】

ガンダムマイスター

【あらすじ】

ある日神の手違いで死んでしまった主人公「秋月淳」は学園黙示録の世界に転生をしてしまった。だが淳は神様に能力を貰い、奴らと立ち向かう！さらに原作キャラも神からチート能力をもらいます。チートが嫌いと言う方は戻るを押してください。

プロローグ（前書き）

初めての小説ですけど頑張っていきます。

プロローグ

「すみません！私はアナタを間違えて死らしてしまいました！」

俺が目覚めると目の前で土下座して謝る一人の美女が居た。…
てゆーか俺が死んでる？なに言ってるんだこの人は？

「私があの時カッターナイフを地上に落としてしまいアナタに当たって死らしてしまいました」

…えーと何がなんだかわかんないんだけど。ふと下を見るとそこには俺が居た。いや正確には腹に大きな穴が空いていて周りは血の海が出来ていた。

「…え？嘘？マジで俺死んでるの!？」

「はい、本当にもうあげありません」

マジかよ…、じゃあ俺はどうするんだよと思っていると。

「この責任は私がします。アナタを転生で生き返さしてあげます」

転生てまた唐突だなあ。まあ生き返えなれるならいいけどな。

「それでアナタはどの場所に転生しますか？」

「それじゃ、学園黙示録でお願いします」

と俺が言つと神は。

「そこでいいんですか？あそこは死亡フラグが満載な場所ですが？」

「ええいいんですよ」

「…ええわかりました。ではアナタに力を与えたいんですが何にしますか？」

と神が聞いてきたので俺は。

「それじゃまず俺が『アルトアイゼン・リーゼ装着！』と言うとアルトアイゼン・リーゼの装甲を装着できるようにしてください。ああと装備はアルトの固定武器の他は両腰にシシオウブレードを2本と射撃武器はO Oライフルを左手に装備してソリッドソードブレイカーオーバーオクスタンを両肩に装備、さらにスラッシュリッパーを背中につけて全ての弾数は無限であとエンジンはG Nドライブと時流エンジンとオルゴンクラウドあとラムダドライブとP S装甲もお願いします。あと身体能力はすべてM A XでさらにS E E Dも使えるようにしてください」

「ずいぶん要求してきたわね…（汗）。まあいいんですけどそれではアナタを転生しますが他は何もありませんか？」

「それじゃ…、転生したらすぐに原作開始する時間帯にしてください」

「わかりました。そこでは行ってらっしゃい」

そう言つと俺の目の前が真っ白になった。

第一話 地獄に舞い降りた古しえの鉄の巨人（前書き）

クダクダかもしれませんが読んでもらえれば嬉しいです。

第一話 地獄に舞い降りた古しえの鉄の巨人

俺が目を開けるとそこは私立藤美学園の屋上だった。時間を見ると原作開始まであと数分というところだ。

「さて今の内に能力を使ってみますか」

そう言っていると俺は。

「アルトアイゼン・リールゼ装着!!」

そう言っていると俺の周りにリールゼの装甲が現れ俺の体に装着された。俺は少し自分の体を見てみるとちゃんとゆったとうりの装備をしていたので「よし、これで大丈夫だ」といい装甲を外すと校門の方から悲鳴が聞こえてきた。原作が始まったようだ。

「さてと、それじゃひと暴れますか！」

そう言っていると俺は学園の中に入ってしまった。

学園の中を走っていると一人の男子生徒に会った。

「!!! あんた誰だ! ここの生徒じゃあないみたいだけど!」

今、目の前にいるのは確か森田? だったような? 一応名前は言うておくか。

「俺の名前は『秋月淳』だ。ちょっと学園の中に来ただけ...」
と名乗っていると向こうから 奴ら が来た。

(ちっ、もうきやがったか)

と言っていると森田が。

「…おいあいつ怪我してるじゃないか！？早く助けないと！」

そう言う森田が駆け寄ろうとするのを腕を掴んでとめた。

「おいっ！何にすんだよ!？」

「バーカ、良く見てみる」

俺にそう言われ森田が良く見てみると顔色を真っ青にして。

「……!？な、なんだよあれ!？」

と気付いたようだ。今こっちに来る生徒のようなものの首の一部がなくなっていた。

「あいつはもう人間じゃねえよ。さてといきますか？アルトアイゼン・リーゼ装着!!」

突然叫んだ俺にビククリしてみる森田が驚いた顔をした。俺の周りにアルトアイゼン・リーゼの装甲が現れ身体に装着したあと俺は。

「さーて、狩りの始まりだ。行くぜ!!」

そう言う俺は一気に加速し 奴ら に向かって。

「これで終りだ!!!リボルビング・バンカー!!!」

そう叫んで 奴ら の頭にバンカーを打ち込むと 奴ら の頭がぶっ飛んでいった。

そして頭がぶっ飛んだ 奴ら はその場で倒れた。俺が後ろを見ると森田が驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「おい！俺はこれから生存者を探してくるがお前はどつする！」
そう言うのと森田はわれりかえり俺の所に来るのを見て一緒に行動すると判断し俺も走った。

二人は連絡通路を走っていると。

「「キヤアアアアアア」」

「「！！」」

二人は悲鳴が聞こえた方え顔を向けるとそこには三体の 奴らに囲まれた女子生徒二人が居た。

「ひっ！やだ！」

「こっちに来ないで！」

そう言うつも 奴ら はどんどん二人の方向かっている。

「おい！死にたくないならふせていろ！！」

俺は二人向かって言うのと両手にシシオウブレードを持つと加速し一体の 奴ら の身体を真っ二つにし残った2体の頭部に一線した。

「おいお前ら、大丈夫か？」

「はい大丈夫です」

「ありがとうございます」

二人は俺にお礼をしてきたので

「いいよお礼なんて。ああそう言えばまだ自己紹介してなかったら、俺の名前は秋月淳だ、よろしく」

「私は上条美鈴っていいいます」

「私は二木敏美っていいいます」

俺が自己紹介すると二人とも自己紹介をしてきた。二人とも俺の鎧を見て驚いた顔をしていた。

「なあ、俺達はこれから学園を脱出のにバスの鍵を探してるんだけど、どこにあるの？」

俺が二人に聞くと

「バスの鍵なら職員室にありますよ。職員室はそこをまがった先にあります」

と敏美が答えてくれた。

「ありがとう。君達も一緒に来る？」

俺が二人に聞くと。

「「はい！」」

「よしっ、それじゃ行こう」

そう言うと三人は俺の後を追いかけて行った。職員室の前までいくと突然。

「キヤアアアアアア！！！！！！」

「「「「！！！」」」」

悲鳴が聞こえてきて急いで行くとそこには一体の 奴ら に電動ドリルを差した沙耶が居た。そこに孝達も居たがその後に 奴らが居た。どうやな孝達は後ろに居る 奴ら に気付いてないみたいだ。俺がまずいと思い一気に加速すると俺が大声で

「全員伏せろ！！」俺の声に孝達がぎずいて後ろを向くとそこには 奴ら が10体ほどいて驚いたがさらにその後には急加速してこっちに来る俺に驚いていたがあえて無視し俺は 奴ら に向かつて。

「 奴ら を追い詰める！！ソリッドソードブレイカー！！さあゆけっ！！」

「「「「「「なっ！？」「」「」「」」」」

俺の肩にあつたソリッドソードブレイカーをバージすると孝達は驚いた顔をした。分離した8個のソリッドソードブレイカーはまるで意思をもっているかのような動きをして 奴ら を攻撃した。さ

らに俺は左手に装備した〇〇ライフルを発射し 奴ら の頭をぶつ
飛ばした。そして 奴ら の頭部を破壊したソリッドソードブレイ
カーをもとに戻して孝達の方に向かっていくと横ら突然 奴ら が
現れて俺の腕に噛みついきたが 奴ら の歯バキツと音をだして折
れた。

「なにつ!?」

みんな驚いた表情をしたが俺は気にせずに。

「だてや酔狂でこんな頭をしているわけじゃない！」

そう言うつと頭にあるプラズマホーンを起動させ 奴ら を真つ二つにした。みんな啞然とした表情をしていたが俺が『早く入ったほうがいいぞ』と言うとみんながはつとして職員室に入っていった。

第2話 全員集合そして脱出（前書き）

急展開なつえにまたクダクダです。

第2話 全員集合そして脱出

俺達が職員室に入るって最初にしたことはバリケードを作るところだ。俺は近くにあった冷蔵庫を持ち上げて扉の前に置いた。ふと視線を感じて振り向くと みんな啞然とした表情で見っていた。

（やれやれ、それじゃ解除しますか）

俺がアルトの装甲を外すと装甲はその場で消えたのでみんなが驚いた顔をした。するとコンタクトを外すしメガネにした沙耶が俺に詰め寄ってきて聞いてきた。

「ちよつとあんた！一体何者！ここの生徒じゃあないみたいだけど、あとあの鎧は何！！」

「確かにキミはここの生徒ではないな。何者なんだ？」

「うおっ！沙耶だけじゃあなく冴子まで。仕方ない話すか。」

「やかった、話すよ。ただし驚くなよ？」

「そう言っただけで話した。話し終わるとみんな信じられないといった顔をしていた。」

「「い、異世界って…ありえない」」

麗と沙耶が同時にそう言い孝や森田、美鈴、敏美もマジかよと言っただけで見ていた。まあ信じられないのは当然だ。だが一部の人は違う反応をした。

「フム、キミの目は嘘を言っていないな。」

「ねえ！―さっきの武器もう一回みせて！―あと銃の方もみせてくれ！―」

「あらあら、異世界なんて凄いわね」

冴子にコータに鞠川先生はいろいろな反応をしていた。まあそれはいいけどな。

その後、いろいろあってバスの鍵を手に入れ職員室を出ることにした。

（まあ、ここまでは原作どおりだな。さてどうなることやら）

そうして一行は職員室を出た。

第三話 新たな力「バニシング・ドルーパー」、「野生の百舌」(前書き)

スパロボOGやった人は分かるかな？あとまたクダクダです。

第三話 新たなる力「バニシング・ドルーパー」、「野生の百舌」

俺達は職員室を後にしバスへと向かった。

「いいか！ 転ばすだけでいい！ 戦闘はある程度避ける！」

「奴ら 音には敏感だから音はあんまりたてないようにね！」

そして階段付近へと差し掛かると。

「キヤアアアア！！！！！」

階段付近に目を向けるとそこにはそこには、 奴ら に恐れそう
になっている生徒が4人がいた。

「嫌っ！ 来ないで！」

「卓三！」

「クソッ！ 下がってろ！」

「死にたくないなら伏せてろ！」

俺がそう言うのと5連チェーンガンを発射し 奴ら を撃破する。

ダダダダダダ！！！！

「ハアッ！」

グシャー！！

そうして冴子も加わって 奴ら を全滅させた。

「あ、ありがとう……」

「声をだすな。噛まれた者はいないか？」

冴子が聞くとみんなはいえいえとジェスチャーで答えた。

「俺達はこれからバスで学園を脱出するが君達はどうする？」

俺がそう言うともみんなついてきた。その後、玄関先の 奴ら を
どうにかして外に出ようとしたとき。

ガキイイーン！！！！

俺の目の前に居た男子生徒の持っていたさすまたが扉の縁に当た

って音が響き渡ってしまった。

「しまっ「みんな走れ!!」」
孝がそう叫ぶとみんな走った。

「なんでさけんだのよ!近くに居る 奴ら だけやっつけられ
いじゃない!」

「無理よ!あんなに響いちゃ!」

沙耶がそう言うも麗がそう言い近寄ってきた 奴ら を倒した。

「チッ!みんな先行け!ここは俺が引き受ける!」

「なっ!?!何言ってるんだ!?!」

孝がそう言うも俺は。

「まあ見てな。行くぜ!アヴァランチ・クレイモア!ソリッドソ
ードブレイカー!スラッシュ・リッパ!行けっ!!」

俺がそう言うのと、肥大化したような肩のハッチが開き中からチタン
弾が発射され背中に装備したソリッドソードブレイカーとスラッシ
ュ・リッパが作動させると一気に 奴ら を倒していった。

だが 奴らは減るところが増える一方だ。一体どこに隠れていたんだ。俺はそう思いながら 奴らを倒していると。

「「淳!!」」

声が聞こえ振り向くとそこには武器を持った美鈴と敏美が居た。すると二人は。

「「私達も手伝う!!」」

「なっ!!? お前な何言ってるんだ! 早く行け!!」

俺がそう言うも二人は嫌だといって 奴らを倒そうとするがその後ろに 奴らが近寄ってきた。

「!?! 美鈴!! 敏美!! 後ろ!!?」

俺がそう言い加速するも間に合わない距離だった。二人は後ろに居る 奴らに気付くももう遅かった。

「「キヤアアアアアア！！！！」」

二人は悲鳴をあげた。

（クソッ！間に合わないのか！）

俺がそう思った次の瞬間二人は光に包まれた。

「な、何だ！？」

淳サイトエンド

美鈴、敏美サイト

私達は淳を助けるためにきたがその後ろに 奴ら がもうすぐそばまで近寄っていた。もう駄目と思った瞬間私達は光に包まれていた。

「ここは？」

「一体？」

私達がそう言い周りを見ています。

「よかった。間に合って…」

「「！？」」

私達は声が聞こえた方を向けるとそこには一人の美女が居た。

「あなたは一体？」

「誰ですか？」

「私はミカエル。あなた達という大天使というものです」

「私達に一体？」

「何かようですか？」

私達が聞くとミカエルは。

「ええ。あなた達に秋月淳と同じ力を授けたいと思ひまして」

「「!」」

私達は驚いた。私達が淳と同じ力をもらえんと思ひていなかったからだ。私達は少し考へてそして

「「お願いします!!私達に淳と同じ力を!!」」

「クスツ、わかりました。ではアナタ達に力を」

そして私達はまた光に包まれた。

美鈴、敏美サイトエンド

淳サイト

クソッ！一体何が起こったんだ！そう考えていると光が無くなっていた。そして俺は驚いた。そこにはヒュッケバインMKⅡの装甲を付けた美鈴とビルドビルガーの装甲を付けた敏美が居たからだ。

「なっ！？美鈴、敏美その鎧は？」

俺が聞くと二人は。

「よく分かんないけどミカエルっていう人がくれたの」

と敏美がそう言い俺は。

（ミカエル…アンタ何やってるの！？まあ、二人が無事なのがいけど…）

俺が考えていると美鈴と敏美が俺の顔を見て。

「これで淳と一緒に戦えるね」

うつ…か、かわいい…、あーもうわかったよ！？もう。

「それじゃあ二人共無茶はするなよ。よし行くぜ！！」

「うんっ!!」

二人が頷き 奴ら に向かって攻撃した。

第四話 学園脱出（前書き）

まだグダグダです。感想をお願いします。

第四話 学園脱出

美鈴サイト

私は今、ミカエルさんがくれた力で 奴ら を倒していた。

「これで落ちて！チャクラム・シューター！！」

キュイイイイイン！！！！

左手に装備してあったチャクラム・シューターを起動させ 奴らの頭部を破壊した。そしてバスの方に近くと。

「みんな！！ここは私が援護するわ！！」

みんな私の装甲を見て驚いているが私はそれを無視し 奴らに M13 ショットガンを放った。

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

だが 奴ら は何故か減るところが増える一方だ。でも 奴ら は一ヶ所に居たためこの武器で一気に倒すと思った。私は一気に加速すると後ろから巨大なランチャーが出現し私はそれを装着した。

「これで一気に決める！！Gインパクトキャノン！！発射！！」

そしてそのランチャーから発射したエネルギー弾は 奴ら に命中した瞬間その周りにブラックホールが発生し 奴らは全滅した。

（よし！これだったな行ける！！）

私はそう思いながら 奴ら を倒していった。

美鈴サイトエンド

敏美サイト

私は今日の前にいる 奴ら にM90アサルトマシンガンを発射しながら倒していた。

「これでっ！！Gインパクトステーキ！」
ズダンッ！！ズダンッ！！ズダンッ！！ズダンッ！！

Gインパクトステーキを食らった 奴らは吹き飛んでいった。

「これで一気に決めます!!ビクティム・ビーグ!!」

そう言うつと装甲がバージして高機動モードになると物凄い速さで
奴らを倒していった。

「早く 奴らを倒していかないと」

私はそう言いながら 奴らを倒していった。

敏美サイトエンド

淳サイト

「アヴァランチ・クレイモア!!」

ズドドドドドドドッ!!!!

「たくっ!?! 奴らは一体どこに隠れていたんだ!?!」

そう思いながら 奴らを倒していると。

「うわあああああ！！！」

「！？」

悲鳴が聞こえた方を向けるとそこにはタオルをかけた男子生徒、卓造が 奴ら に捕まっていた。

「クソッ！おい卓造絶対動くなよ！！」

俺はそう言つとO・O・ライフルを構えて卓造の周りにいた 奴ら を撃つた。

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

O・O・ライフルを発射しながら周りにいた 奴ら を倒していった。

「おい、大丈夫か！？」

「あ、ありがとう」

俺は聞くと卓造はお礼を言った。

「お礼を言っている暇があるなら早くバスに向かえ!!」

俺がそう言うと卓造は頷いてバスへと向かって行った。しばらくバスを援護していると。

「淳君！美鈴ちゃん！敏美ちゃん！もういいわよ!!」

バスの方から鞠川先生が大声で言った。バスの準備が出来たようだ。

「よし！美鈴！敏美！行くぞ!!」

俺が大声で言うと二人は。「うん!!」とこたえてバスの方へいった。

「それじゃ俺も」……「つてくれー!!」ん？」

俺は声が聞こえた方に顔を向けると何人かの先生と生徒がこっちに向かってくる。……まあ、先生の方は分かる。確か紫藤とかいう嫌なヤツだ。……つてちよつとまで確かあいつ……まずい!!俺がそう思って急いでブースターをひらき一気に加速した。

淳サイトエンド

紫藤サイト

全く状態じゃない、人が人を食べるなんて。：まあ今考えても仕方ないですね。しかし数が多いですね、このままじゃたどり着かないですね。どうすれば？

「先生っ！！足首捻りました！」

：おや、どうやら私はまだ神に捨てられてないようですね。ではこいつにはこいつらのエサになってもらいましょう。

「おや、そうですか。ではここまでのようですね」

私はこの生徒の顔を蹴ろうとした次の瞬間。

「前より大口径だ！ダダで済むと思うな！！」

「「え？」」

当然後ろから声が聞こえた次の瞬間近寄っていた 奴ら が次々と倒していく赤い何かが居た。

「さて、おい、大丈夫か？」

「あ、ありがとう…」

な、何だこいつは！？化物か！！

「おい、お前一体なにやろうとしていた。足首を痛めた生徒を蹴ろうとしたように見えたが」

くっ！見られていたとは。…だが。

「おやつ、何のことですか？」

ここでどうにかしないと厄介なことになりますかね。

紫藤サイトエンド

淳サイト

「おや、何のことですか？」

どうやらなんとかして誤魔化そうとしているのがバレバレだ。

「フンッ、勝手に言ってる。おい早くバスへ行くぞ」

俺は足首を捻った生徒を助けバスへと向かった。そしてバスに乗り込み。

「鞠川先生！出してください！」

「…ありがとうございます。リーダーは毒島さんですか？」

「そんなのは居ないみんな脱出するために手を組んだだけだ」

紫藤の考えていることは分かる。自分がリーダーになると言うてくるんだろ。

「もう人間じゃない。人間じゃない！」

鞠川先生がそう呟き 奴ら をひいて行つて学園を脱出した。学園を出ると町はあちこちから火がでていた。これから始まる地獄に俺達を乗せたバスは町へと向かつて行つた。

第五話 新しい能力 「国境なき軍隊」 (前書き)

分かる人には分かる!!

第五話 新しい能力 「国境なき軍隊」

バスをしばらく走らせていると、原作どつり金髪の不良が騒いでいる。俺は一応無視し美鈴と敏美に話しかけた。

「なあ、二人に力をくれたミカエルは俺に何か言っ
てなかった？」

俺は二人に聞いたが。

「えっ？ううん」

「何も言っ
てなかったよ」

「そうか」

どうやらミカエルは俺には何も言っ
て無いか。そう思いながら自分のポケットに手を入れた。

カサッ…

（ん…何だ？）

ポケットの中に何か入っていた。それをポケットの中から出すとそれは手紙だった。差出人を見るとそれはミカエルからの手紙だった。俺はその手紙を開いて見てみた。そこにはこう書かれていた。

秋月淳へ

あなた達がもし目的を達成した後のことを考えてアナタに新しい能力をあげたいと思ひましてこの手紙を送ります。そしてアナタに与える能力はメタルギア的能力です。まず、MSFの本拠地であるマザーベースが太平洋のど真ん中に設置しておきます。これで 奴らは絶対入ってこるません。更に支援補給マーカ―（設置型）を使えば武器、アイテム、大型兵器、A I兵器などを寄越すことが可能です。ちなみにアナタはMSFの総司令官という地位ですのでコードネームは『スネーク』です。でお忘れなく。ちなみにメタルギアに出てきた登場人物もマザーベースにいますので。では淳、アナタに幸運を。

ミカエルより

……えーっと、何故俺がMSFの総司令官なの！？ミカエルさん
アンタ何考えてるの！！俺は愚痴を言いながら念のため通信をかけてみた。

ビーー！ビーー！ビーー！

ガチャッ

《こちらカズ》

スゲー！！ホントにカズが出来たー！！ってじゃなくて！！

「こ、こちらスネーク」

《ん…何だボスか。どうしたんだ？》

「いや…世界がこんなことになってちゃんと通信出来るかと思っ
て…」

《何だそんなことか、通信なら大丈夫だ。ここの通信は普通の通
信じゃないからな、ちゃんとできますよボス》

どうやらマザーベースの通信は大丈夫みたいだ。

「わかった。何かあったらまた通信する」

《了解だ。スネーク》
ガチャッ

フウ、まさかカズが出てくれた驚いた。全くミカエル一体中考え
てるんだ。まあおかげでこちらの最終目的地が出来ただけまし

俺はそんなことを考えていると紫藤がリーダーになると突然言っていた。その後、俺が言ったことにみんな驚いていた。まあそうだろう、紫藤が自分が生き残るために生徒を見殺しにしようとしたのだから。さてこの後どうなることやな。

オリキャラ、能力紹介（前書き）

今回はオリキャラと能力の紹介をしたいと思います。

オリキャラ、能力紹介

名前 秋月淳

身長 165cm 体重 49kg 年齢 17歳

要素

スパロボOGのキョウスケが少し若くなった感じで髪は赤い。

転生理由

大天使ミカエルが休日るとき読書をしているとき誤ってカッターナイフを落としてしまいその下を歩いてた淳に当たってしまい死んでしまったから。

生前

学園では普通に過ごしていたが頭が良くスポーツはすべてプロ級で異性からはモテモテだった。

趣味

ゲーム ブラモ作り 読書など

好きなゲーム

スパロボ系

好きな機体

アルトアイゼン・リーゼなどの近接型の機体

能力

アルトアイゼン・リゼ

アーマー装着

SEED

MSFの総司令

アルトアイゼン・リゼの固定武装解説

5連チェーンガン

アルトの固定武装で射程のある武器。牽制用だが 奴ら あいてなら一撃で倒せるほどの威力がある。

プラズマホーン

アルトの頭にある近接用の武器。角にプラズマを流し敵を切り裂くことが可能。 奴ら だけでなく車なども切ることができる。

リボルビング・バンカー

アルトの固定武装の中でよく使われる武器。先端が尖っており敵に刺した後リボルバー式の弾丸で釘うち機の要領であいてを撃ち抜くことが可能で戦車の装甲も貫通できる。 奴ら あいてだとバンカーを使わなくても倒せる。

アヴァランチ・クレイモア

アルトの肩に装備された武器。中にはクレイモア弾と炸裂弾が入っており至近距離にいる敵を倒せることが可能。 奴ら があいてだと数が多い時に使用する。

エリアル・クレイモア（必殺武器）

アルト最強の武器。まず5連チェーンガンで牽制し近くまで寄った瞬間プラズマホーンで切りつけ地面に叩きつけリボルビング・バンカーを打ち付けた後アヴァランチ・クレイモアをお見舞いする。なおこの武器は本編ではまだ使っていない。

アルトアイゼン・リーゼ追加武器

オーバー・オクスタン
O・O・ライフル

アルトに追加された射撃武器。この武器は実弾とビームを撃ち分けて撃つことが可能。この武器はヴァイスセイバーの武装だが淳の希望で付けた。

スラッシュ・リッパー

アルトに追加された武器。アルトの背中に装備されており使用する
と手裏剣のような武器が出てきて敵を切り裂く。

ソリッドソードブレイカー

アルトに追加された遠隔操作型武器。アルトの背中に装備されており使用すると8個のソリッドソードブレイカーが発射され敵を攻撃する。なおこの武器は撃つだけでなく敵にアタックすることが可能。この武器もヴァイスセイバーの武器だが淳の希望で付けた。

シシオウブレード

アルトに追加された武器。両腰に装備しており日本刀の形をしている。切れ味は抜群で戦車の装甲を豆腐のように切り裂くことが可能。ちなみに淳はこれを二本もっている。

SEED

知っている人は知っているガンダムSEEDの一部のキャラが使用できる能力。使くと視界がクリアになり敵の動きがよく分かるようになる。

MSF総司令官

ミカエルが追加してくれた能力。孝達の両親の無事、または避難民と共に逃げるさいの最終目的地でもあるマザーベースの総司令官。

アーマー装着

秋月淳が生き残るために頼んだ能力。アーマーを装着する事でその装着したアーマーの能力が使用できる。淳の場合アルトアイゼン・リーゼの能力が使用できる。

追加システム

G Nドライブ

アルトに追加されたシステム。半永久的に生み出すエネルギーで機体や武器の使用が可能。ちなみにアルトのG Nドライブはツインドライブシステムである。

ツインドライブシステム

アルトに追加されたシステム。G Nドライブ2基のマッチングによって二倍ではなく、二乗化した粒子量を得ることが可能。

オルゴンクラウド

アルトに追加されたシステム。

アルトの急加速に発生するGを抑えるために付けたシステムだが、機体を瞬間移動したり、バリアなどを発生させることが可能。

ラムダドライブ

アルトに追加されたシステムパイロットの思いを力にかえることが可能だが、まだはつきりしたことは分かっていない。

P S装甲

アルトに追加されたシステム。一定電圧の電流を流すことで相転移

する特殊な金属でできた装甲のこと。一定のエネルギー消費と引き換えに物理的衝撃を無力化できる。なお機体のエンジンはGNドライブなのでエネルギー切れは起きない。

弾数無限

その名の通り弾切れが起きないシステム。アルトの武装は弾数式なので重要視されている。

第六話 激怒！！（前書き）

何処かで見たような……？

第六話 激怒！！

俺が言ったことに紫藤は青ざめている。そしてみんなは驚いていた。まあ、気にしないけど。更に紫藤をリーダーと認めない生徒が俺の後ろにいる。まず原作メンバーの他に、森田、美鈴と敏美、俺達が助けたタオルをかけた男子生徒とその彼女の女子生徒、卓造と麻、卓造達と一緒に逃げていた男子生徒と女子生徒、（ちなみに女子生徒はホントは紫藤の信者になるはずの人）そして俺が助けた 奴らのエサになりかけた男子生徒、冬木（バスでしばらく移動してた時に名前を覚えてくれた）が居た。

「こ、こんな状況でみなさんはリーダーが必要無いのですか」

どうやら紫藤は焦っているようだ。まあ、当然だろう。

「確かに、リーダーは必要かもしれませんね。先生……」

俺の後ろにいる卓造がそう言った、「なら……」と紫藤が言うとしたが、まさかこう言うとは俺自身驚いていた。だって予想外だもん。

「俺がリーダーと認めるのは秋月淳だけだ！」

……って、えっ……！？お、俺がリーダー！？何言ってるの卓造！

？確かリーダーは孝だろう！？

「私もリーダーは淳が良いと思います」

おいっ、麻！？で、いいんだよな？何でお前まで！？

「確かに、リーダーは淳が良いと思うわね…」

「私もその意見に賛成だ」

「俺もだ！！淳は怪我をして動けなかった俺のことを助けてくれたんだ！！」

「私、秋月さんがリーダーでいいと思います」

おいおい！！みんな何言ってるの！！そしてその女子生徒！？
確か君は紫藤の信者になるんじゃないかったのか！？

「そ、そんな…皆さんはその訳の分からない奴をリーダーと認めるんですか！？」

おうおうひどく慌てちゃって。自分の計画が崩れちゃって慌てているのだろう。

「ええ、彼は異世界人ですが俺達を助けるために頑張ってくれました。あなたの様に自分の命欲しさに他人を犠牲にするような人をリーダーとは認めません」

うおっ、孝が凄いことを言ってきたよ。ちなみにここにいる人には俺のことは言ったがまさか俺がリーダーになるなんて考えなかったよ。

その後、予想どおり道路は混んでいた。

「1キロ進むのに1時間か…」

「そろそろ潮時ね…」

「みんな、準備はいいか？」

俺がみんなに確認をとる。みんなは頷いてくれたのでバスを降りようとした矢先に。

「おや、皆さんどうしたんですか？ここは一致協力して…」

「俺達はバスを降りるぜ。俺達はアンタ達とは違って目的が違うからな」

そう紫藤に言った。

「おや、そうですか。ええ構いませんよ、ここは自由の国ですからね…」

そう言うも紫藤の視線はこちらの誰かに向けられていた。

「しかし、あなたは困りますね、鞠川先生。現状で医師を失うのはメリットが大きすぎます」

そう言い鞠川先生に近づくとする紫藤の前へアーマーを装着しながら出た。ちなみに後ろでは美鈴と敏美が俺と同じようにアーマーを装着してみんなを守るように前にたった。

「おや？何のようですか秋月君？」

「おい、俺の仲間に手をだすな…」

ガチャン！

俺はバンカーの弾を装填すると紫藤が怯えた。

「で、でしたら武器を置いていってください」

どうやら紫藤は武器を要求してきた。だが俺は。

「断る」

俺がそう言つと紫藤をはじめ後ろにいる信者達が驚いた表情をした。奴らにとって紫藤の言っていることが正しいと思っっているのだから。

「あ、あなたは私達を見捨てるのですか!」

「俺はあんた達を助ける義理はない」

俺がそう言つと紫藤の信者である金髪の不良が。

「なんだ!!紫藤先生が正しいんだ!!さつさと武器を渡せや化物!!」

と俺に掴みかかってきた。だが俺は

「うるせえんだよ…」

俺がそう言い掴みかかった不良生徒の腹を殴った。その際バンカーが生徒の腹に刺さった。ついでとばかりにバンカーを撃ち込んだ。

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

バンカーを食らった不良生徒は吹き飛び床に倒れた。そしてその不良生徒は二度と起き上がらないだろう。

「「キヤアアアアアア！！！！」」

紫藤に酔狂していた女子生徒が叫び、男子生徒は怯えた表情をしてこちらを見ていた。後ろのみんなも驚いているが俺は紫藤に近寄った。紫藤は怯えたが。

「紫藤…俺は今まで我慢していたがもう我慢の限界だ…」

俺がそう言うと紫藤を左手で殴った。

「ゲハッ!!」

「こいつはおまけだ。取っときな!!」

そう言い渾身の一撃で殴った。

ドッコーン!!!!!!

「グギヤアアアアア!!!!!!!!!!」

そして紫藤が気を失ったようだ。だがまだ殺り足りない。そこで俺は

「おい!!このゴミ(紫藤)にムカついているヤツいるか!俺と一緒に手伝ってやるぞ!!」

俺がみんなに言うとコータが前に出てきて。

「秋月!!最初は俺が殺る!!殺らしてくれ!!」

そう言うコータの目が笑っている。そう言えばゴミはいつもコータをいじめていたんだっけ。まあ、いいけどな...(笑)

「よしっ！！行くぞコーター！！」

そう言い気を失った紫藤をコータのところまで走った。コータはラリアットの体勢にはいった。勿論俺もだ。

「クロ・ボバー！！！！！！」

ドッコーン！！！！！！！！！！

「アギヤアアアアアア！！！！！！！！！！」

まさか初めてのクロ・ボバーが綺麗に決まるとは俺も驚いた。おっ、どうやら気がついたようだ。さあパーティーの始まりだ！！

「次は俺だ！！」

次は 奴ら のエサになりかけた冬木だ。紫藤を殺れると分かって目が笑ってるぜ！！

「あ……あの……皆さん……ぼ……暴力は……」

え、何？誰か何か言った？

その後、孝や卓造、ほかのみんなゴミを痛めつけた。うんっ楽しいね（笑）！！

「最後は袋叩きだ！！賛成ですか！！」

「『『『『『賛成！！賛成！！』』』』」

どうやらみんな参加のようだ！！さあ！！パーティーの始まりだ！！！！

みんなで蹴ります、蹴ります！！！！！！

「が……モ……ウシマ……」

だから！！！！俺はゴミの言葉ワカリマセン！！

そしてボロボロになったゴミを麗の前に出した。……さあ殺れ麗！！！！

「さあ……最後のメインイベントおもしろいきり殺っちゃいなさい！
！！！！（笑）」

「ええ……ありがとう……淳（笑）」

うおっ、麗の小悪魔じみた顔がたまらん……さあ殺れ（笑）！！！！

「はあああああ……！！！！！！！！！」

ドッコーン!!!!!!!!!!!!!!

「グハギヤアアアアア！！！！！」

麗の渾身の右ストレートを食らうて倒れた紫藤。その紫藤に群がる信者ども。こんな状況でも紫藤を信じる馬鹿な連中。

「さうで、ゴミを殺したし、さっさとでるぞ。」

俺がみんなに言うとなんかバスを降りた。うん！！ゴミを殺った後はすっきりしたなっ！！そして俺達はバスを後にした。

第七話 武器補給そして休息（前書き）

ここで現在の淳達のメンバー

秋月淳

異世界からやってきたみんなのリーダー、能力者

小室孝

藤美学園の生徒

宮本麗

藤美学園の生徒

高城沙耶

藤美学園の生徒

平野コータ

藤美学園の生徒

毒島冴子

藤美学園の生徒

鞠川静香

藤美学園の保健の先生

卓造

藤美学園の生徒

麻

藤美学園の生徒

森田

藤美学園の生徒

上条美鈴

藤美学園の生徒、能力者

二木敏美

藤美学園の生徒、能力者

美雪

藤美学園の生徒

冬木

藤美学園の生徒

一樹（後で教えてもらった）

藤美学園の生徒

第七話 武器補給そして休息

俺達はバスを降りた後、話し合いで鞠川先生の友達の家に行くことになった。そして俺はみんなにMSFのことを話した。そして孝が聞いてきた。

「それじゃそのマザーベースってところは安全なんだな？」

「ああ、何せ太平洋のど真ん中にあるんだからな、セキュリティも万全だ。あつ、それとマザーベースの名前はアウター・ヘブンだ」

みんなの顔が明るくなった。まあそうだろう。世界がこんなになつて安全な場所なんて無いと思っていたのだからな。

「それにしてもMSF…アウター・ヘブン…国境なき軍隊と天国の外側ね…、一体何でこんな名前なの？」

沙耶が聞いてくるが俺は「企業秘密でお願いします」と言っている。

「フム、ではまずみんなの家族の安否の確認、確認した次第でそのアウター・ヘブンにみんなで避難する、と言いことだな」

冴子がみんなに確認して鞠川先生の友達の家に向かおうとすると。

「ちょっと待つて。みんなに武器を渡すから」

「は？武器つてあんた…」

「まあ見てな」

そう言い俺は何故か俺のポケットの中に入っていた支援補給マーカー（設置型）を置いて支援物資を記入しスイッチを押した。

カチッ

《支援要請を確認した。今配達する》

何処からともなくカズの声が聞こえみんなビックリしてみたみたいだ。程無くするとヘリの音が響き渡った。

ババババババ！！！！

「？何の音だ？」

みんな不思議がっていると。

「おっ！来たみたいだ」

みんな俺の顔が向けられていた方を向くとそこにはバルーンにぶら下がっている大きな箱がこちらに向かってきた。

「何あれ？」

敏美が不思議がっているとバルーンは支援補給マーカ（設置型）が置いてあった場所まで来るとバルーンが破裂し箱が落ちてきた。

パンツ… ヒューン…ドッコーン！！！！

すると淳が箱の方にいき蓋を開けるとそこは大量の武器が入っていた。ちなみにコータはというと。

「うつしよーい！！」

…何故か踊っていた。

「ちよつとあんた…何これ…」

みんな啞然としていた。

「まあね、みんなこれに着替えてくれ」

そして俺が出したのはMSFの野戦服の一つネオMOSS迷彩服だ。

「着替えろって言っても着替えて何か変わるの？」

一緒に来た女子生徒、美雪が聞いてきた。

「ん？ああこれはMSFの作った野戦服で見た目はだたの服だが中身は全然違う。まずこの服の最大の特徴は俺や美鈴と敏美のアーマーと同じPS装甲が使われている。物理攻撃しかしてこない奴らに対して完全に無力化できる。更にこれには攻撃補助プログラムも入っているってたとえ訓練していなくても普通に戦闘できる。そして背中には武器を保管できる場所があり最大で12個まで入る。更にこれは足音を消す効果があり 奴ら に見つかる確率は低くなる。そしてその服の中に俺達と同じGNドライブが入っていてPS装甲の電力や携帯の充電でき更にGNフィールドって言うバリアを形成できる画期的なやつだ」

とみんなに説明した。麗や沙耶が呆れていたがみんな着替えることにした。ちなみに女子は近くにあった家の中で着替えている。

しばらくお待ちください

しばらくして着替え終わり俺はみんなに武器を渡した。

「まずみんなに標準装備としてアサルトライフルはM16A1を（サイレイサー・レーザーサイト付き）、ハンドガンはM1911A1（サイレイサー付き）を渡して置く。装備品は無限バンダナだ。この無限バンダナは銃の弾が無くなった時にバンダナに手を入れるとその武器の弾が出てくる。後の武器は自由に選んでくれ」

俺の説明を聞いた後、みんな各々の武器を取り始めた。そしてみんな武器を自分の背中に入れた。

「ではまず、鞠川先生の友達の家に行こうか？」

冴子が言いみんな鞠川先生の友達の家に向かった。

） 20分後

友達の家に着くとそこにはハンヴィー（軍仕様）が置いてあった。

「…何故ハンヴィーが置いてあるんだ？」

「さあ…、それより早く中に…！！」

喋っていた孝が黙り込んだ。理由は簡単。マンションの中に 奴らが居たからだ。さて、どうしよう……。

1…倒して占拠

2…別の場所を探す

3…諦める

…まあ、ここは1番だな。早く殲滅して少し眠ろう。俺と美鈴、敏美はアーマーを装着しそしてほかのみんなは各々の武器で 奴らを一気に倒していった。

「おらっ！！これで終りだ！！シシオウブレード！！一刀両断！！」

ズバッ！！

「我が剣に絶てる物無し」

そして俺は最後の一体を倒して決め台詞をいった。俺は剣を鞘に戻しアーマーをバージして鞠川先生に言った。

「それじゃ鞠川先生、部屋に案内してください」

「はいはい」

「はいはい」

先生がそう言うみんなを部屋に案内した。部屋に入るとそこは高級感あふれる部屋だった。そして俺達は世界が崩壊して初めての夜を過ごした。

MSFチーム装備一覧（前書き）

今回はMSF（淳達の）メンバーの武器を紹介します。ちなみに標準装備であるM16A1（サイレイサー・レーザーサイト付き）とM1911A1（サイレイサー付き）は表示しませんが、M16A1のオプションパーツをつけたさいは表示します。秋月淳、上条美鈴、二木敏美は標準装備以外装備していない（能力者だから）ため表示しません。

MSFチーム装備一覧

小室孝

(アサルトライフル)

M16A1(ショットガン装備)

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

C A W

M37(ロングパレル)

(サブマシンガン)

無し

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

M G 3

(ミサイル)

M202A1

(その他武器)

スタングレネード

宮本麗

(アサルトライフル)

G 1 1

(ハンドガン)

P M(サイレイサー付き)

(ショットガン)

無し

(サブマシンガン)

U Z 6 1 (サイレイサー付き)
M P 5 A 2 (サイレイサー付き)
(スナイパーライフル)
無し
(マシンガン)
無し
(ミサイル)
L A W
(その他)
無し
平野コータ
(アサルトライフル)
M 1 6 A 1 (グレネード装備)
F A L
S U G
(ハンドガン)
カンピピストル
M 1 9 (レーザーサイト付き)
(ショットガン)
無し
(サブマシンガン)
無し
(スナイパーライフル)
ナイトビジョン
S V D
P T R S 1 9 4 1
レールガン
(マシンガン)
P K M
M 6 3 A 1

(ミサイル)

RPG7

(その他)

クレイモア地雷

高城沙耶

(アサルトライフル)

無し

(ハンドガン)

PM(サイレイサー付き)

PB(サイレイサー付き)

6P9(サイレイサー付き)

(サブマシンガン)

M10(サイレイサー付き)

MP5A1(サイレイサー付き)

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

無し

(ミサイル)

無し

(その他)

無し

毒島冴子

(アサルトライフル)

無し

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

無し

(サブマシンガン)

無し

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

無し

(ミサイル)

無し

(その他)

シシオウブレード(淳から譲り受けた)

鞠川静香

(アサルトライフル)

G11

(ハンドガン)

PM(サイレイサー付き)

(ショットガン)

スパス12

(サブマシンガン)

Uz61(サイレイサー付き)

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

無し

(ミサイル)

無し

(その他)

スタングレネード

森田

(アサルトライフル)

M16A1(グレネード装備)

RK47

(ハンドガン)

カンピストル

(ショットガン)

C A W

(サブマシンガン)

無し

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

M G 3

P K M

M134ガドリリング機関銃

(ミサイル)

M202A1

X F M - 4 3

カールグスタフM2

M43

(その他)

無し

卓造

(アサルトライフル)

R P K

A D M 6 3

SUG

M653

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

M37(サイレイサー付き)
スパス12

(サブマシンガン)

無し

(スナイパーライフル)

WA2000

(マシンガン)

M60

(ミサイル)

無し

(その他)

無し

麻

(アサルトライフル)

G11

(ハンドガン)

C96

(ショットガン)

無し

(サブマシンガン)

MP5SD2(サイレイサー付き)

Uz61(サイレイサー付き)

M10(サイレイサー付き)

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

無し

(ミサイル)

無し

(その他)

スタングレネード

美雪

(アサルトライフル)

G11

パトリオット

(ハンドガン)

PM(サイレイサー付き)

(ショットガン)

M37(ロングパレル)

スパス12

C A W

(サブマシンガン)

M10(バレルジャケット付き)

M1928A1

(スナイパーライフル)

W A 2 0 0 0

P T R D 1 9 4 1

(マシンガン)

無し

(ミサイル)

無し

(その他)

無し

冬木

(アサルトライフル)

M16A1(ショットガン装備)

M653(ショットガン付き)

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

C A W

(サブマシンガン)

U z 6 1(サイレイサー付き)

M P 5 S D 2(サイレイサー付き)

(スナイパーライフル)

無し

(マシンガン)

M 1 3 7ガドリリング機関銃

(ミサイル)

X F M - 4 3

M 4 7

(その他)

無し

一樹

(アサルトライフル)

R K 4 7(グレネード装備)

(ハンドガン)

無し

(ショットガン)

無し

(サブマシンガン)

無し

(スナイパーライフル)
ナイトビジョン

SVD

レールガン

(マシンガン)

M63A1

MG3

(ミサイル)

LAW

カールグスタフM2

M47

(その他)

グレネード

第八話 仮拠点

俺達はマンションに居た 奴らを倒してひとときの休息をしていた。

「とりあえず女性陣は風呂に入っておけ。またいつ入れるか分からないからな」

俺は女子達にそう言いみんなに風呂に入っていった。そして俺達は家の探索を開始した。

「それじゃ俺と森田、冬木は一階から搜索する。孝とコータ、一樹、卓造は二階の搜索してくれ」

「わかった。それじゃコータ、一樹、卓造行くぞ」

孝がそう言い四人は二階に向かった。そして俺達も一階の搜索を開始した。

〽数分後〽

予想どおり一階からは何もなかった。そろそろ二階の搜索も終わる

頃だろう。すると二階から。

「やっぱりあった……！！」

俺達が二階に行くところには孝達が壊れたロッカーの前に居た。そしてその場所には、コータが悪人面をしていた。

「……一体どうしたんだ？」

「いや……、コータが……」

するとコータが一つの銃を取り。

「スプリングフィールドM1A1スーパー・マツチか、セミオートだけでも、M14シリーズのフルオートなんぞ弾の無駄遣いにしかないし……」

「おい、平野……（汗）」

俺が声をかけるもコータは次の銃講座を始めた。

「ナイツSR-25狙撃銃……いや日本じゃそんなものに入らないからAR-10を徹底的に改造したのか！ロッカーに残ってるの

はクロスボウ、ロビン・フッドが使った奴の子孫だよ。バーネット・ワイルドキャットC5。イギリス製の有名な猟用クロスボウだ!!」

「なあコータ、これは？」

一樹が残っていた銃を取りコータに聞いた。

「それはイサカM-37ライオット・ショットガン！アメリカ人が作ったマジヤバなショットガンだ！ヴェトナム戦争でも活躍した!!」

「へー…」

一樹がポンプアクションしコータに銃口を向けた。

「たとえ弾が入ってなくても銃口を向けるな！向けていいのは…」

「奴ら だけか…」

俺達が言つとコータは頷いた。

その後、森田に外を見張ってもらい俺達は弾をマガジンに入れる作業をした。しばらくしてマガジンに弾を入れ終わると見張っていた

森田が。

「みんな、ちゃんとテレビつけてみてくれ」

俺以外のみんなは不思議に思いテレビをつけた。

『警察の横暴を許すなー！！！！われわれはあ！！政府とアメリカの！！！！開発した生物兵器によるう！！！！殺人病の蔓延についてえ！！！！徹底的に糾弾するう！！！！！！』

テレビで集団がいろいろと叫んでいる。つーか殺人病って。

「正気かよ！死体が歩いて人を襲うなんて現象科学的に説明がつくはずなのに！」

「ってことは彼らは設定マニアなのかな……」

孝の言ったことに一樹が言ってきた。すると橋のふもとに居た警官が彼らに近付き忠告したが彼らはその警官に帰れコールをし始めた。するとその警官は何か独り言をいい始めヘルメットを被った青年の頭に拳銃をあて発砲した。次の瞬間画面がしばらくお待ちくださいと映った。

「……もう警察は崩壊を始めたようだな。軍も多分あてにならなくなるだろな」

俺が言ったことにみんな顔が暗くなった。すると俺は後ろから気配を感じその場から離脱した。

「……よつと」

「淳？…どわっ！？」

「うっふん。こっむっろっくん」

俺が回避するとそこにはタオル一枚だけ羽織った鞠川先生がいて孝に抱きついた。

「何だ先生か…って！？酒くさっ！？先生酔ってるんですか！？」

「ちよつと、ちよつとだけよ。ふふん」

俺は嫌な予感がしてそそくさとその場を後にしようとする。すると孝が俺に

「じゅ、淳！どこに行くんだ！？助けていつてくれ！？」

「……ごめん！！無理！！」

俺は脱兎のごとくその場を離脱した。

「淳！！？裏切り者！！？」

孝の悲痛（？）の叫びを聞きながら俺は一階に降りて行つた。

～ロビー～

「ふう～」

俺はため息を吐きながらソファーに腰をおろした。すると後ろから突然誰かに抱きつかれた。

「「淳」」

「うわっ！？…何だ美鈴と敏美か…って！？酒くさっ！？お前な酒飲んだのか！？」

何でこの人達は酒に走るんだ。

「だって…世界がこんなになって…」

「私達疲れたんだもん」

「そ、そうか…。分った、今はゆっくり休んでくれ」

そう言うと二人は。

「それより私達…」

「淳に…」

「話があるの」「」

「な、何だ？」

俺が二人に聞くと。

「私達ね」

「淳の事が」

「大好き!!」

「…っは？な、何で二人とも俺が好きなんだ？」

俺が不思議がって二人に聞くと。

「私達が 奴ら に襲われそうになった時に」

「助けてくれた淳の事が」

「好きになったの!!」

二人とも顔を赤くして恥ずかしがっていた。そうか…俺の事が好きになったのか。よしっ！俺も男だ！二人にちゃんと返事をしないてな!!

「……よしわかった!!二人とも俺が絶対幸せにしてみせる!!
だから一緒に生きて頑張ろうな!!!!」

「うんっ!!ありがとう!!淳っ!!」

二人が俺の頬にキスをして俺の肩に寄り添うにして眠った。

「……どうしよう?う、動けない…、まっいつか」

俺はそう言い俺も眠りに着いた。

第九話 希里親子を助けるー！そして新しい能力「ゴースト」(前書き)

ここで美鈴と敏美の武器一覧です。

美鈴

ヒュッケバインMK-2 固定武装

頭部バルカン

ビームソード

フォトン・ライフル

チャクラム・シューター

Gインパクトキャノン(必殺)

追加武器

Gインパクトステーク

リニアミサイルランチャー

M13 ショットガン

F2W キャノン

以上

敏美

ビルドビルガー 固定武装

3連ガドリング

M90 アサルトマシンガン

コールドメタルソード

スタッグビートル・クラッシャービクティム・ビーグ(必殺)

追加武器

G インパクトステーク

グラビトン・ランチャー

ネオ・チャクラムシューター

F2W キャノン

以上

第九話 希里親子を助ける！！そして新しい能力「ゴースト」

俺は二人の告白を受け今二人は俺の肩に寄り添って眠っている。俺も少し眠ろうと目をつむった瞬間コータの声が響き渡った。

「ロックンロール！！」

ズダンッ！！

銃声からしてSVDのものだろう。ナイトビジョンと言いことは多分ありすを助けているのだろう。俺は二人を起こした。

「おい、二人とも起きて」

「うゝん……」

「あつ、淳おはよ」

二人は目を擦りながら起き上がった。

「うんお早う。二人とも今すぐ軍服に着替えてアーマーを装着して。戦闘準備だ」

「何かあったの？」

美鈴が聞いてきたので俺は答えた。

「ああ、多分コートが生存者を助けているんだろうな。だかな俺達も助けに行くぞ」

「うん！」

二人とも頷いて脱衣場に向かった。俺は二階に上がるとそこにはスナイパーライフルを構えたコート達が居た。

「コート！一体何があった！」

「じつはある親子が民家に走っていてその住人に助けを求めただけどその住人が槍のような物で父親が指されそうだったんだ！」

どうやら原作どおりだな…ってあれ？刺されそうだった？

「コータもしかしてその父親ってまだ生きてるの？」

「？、うんそうだけど？」

「どうしたんだ？」

コータと卓造が不思議そうに聞いてきた。「いや…何でも…」と答えた。どうやらありすの父親は生きているようだ。

「それで孝は？」

「孝ならその親子を助けるために外に居るよ！」

と一樹が指を指した方を見ると孝が何処で手に入れたのか分らないがバイクに乗って親子のいる住宅へ向かっていた。

「わかった。それじゃ俺は美鈴と敏美と一緒に外に出て 奴らを撃破してくる！」

俺はそう言いすぐさま一階に向かった。すでに美鈴と敏美がアーマーを装着して待っていた。

「淳！」

「こっちの準備出来たよ！」

俺は「わかった」と言いアーマーを装着して外に出た。

「よしっ！行くぞ！！二人とも！！」

「「わかった！！」」

二人はそう言い俺達は 奴ら に向かって攻撃を開始した。

孝サイト

くそっ！助けに来た俺がまさか脱出出来ない状況になるなんて！

「孝君すまない。私達のためにこんな目になってしまっ」

と父親が謝ってきた。

「いえ、気にしないでください」

俺が二人に話し合っていると塀の外から何か聞こえた。

「アヴァランチ・クレイモア!!」

ズドドドドドドドッ!!!

「Gインパクトキャノン!! 発射!!」

ドッコーン!!!

キュルルルルル!!!

「これで!! ビクティム・ビーグ!!」

ズババババッ!!!

どうやら淳達が外で 奴らを倒しているようだ。だが 奴らはまだ沢山いる。クソッ!!

「お兄ちゃん、これ何の音？」

と少女が俺に聞いてきた。

「ああ、これは俺の仲間が外で戦っているんだ」

ちくしょう！！俺は何も出来ずにここにいるだけなんて！！俺がそう思っていた。すると突然。

（それではアナタに力を与えましょう…）

「！！」

突然、頭の中から声が聞こえた。

（誰だ！！）

俺が頭の中にそう思っているとまた

（私はミカエル。秋月淳達に力をあげた者です）

(!!何だと!!)

突然頭に響き渡るミカエルと言う奴が俺に力をくれる？だが俺は…

(…わかったミカエル。俺に力をくれっ！みんなを守る力を！
！)

(わかりました。ではアナタに力を…)

そして俺は光に包まれた。

孝サイトエンド

淳サイト

「クソッ！！一体全体何処に隠れていたんだ！？」

俺は愚痴を言いながらもO・O・ライフルを使い 奴ら を倒していった。

「まったく本当だよっ!!」

美鈴がM13ショットガンを使いながら言い

「いい加減にしてよっ!!まったく!!」

敏美も文句を言いながらネオ・チャクラムシューターを使い 奴らを倒していった。

クソッ!! 孝達は無事何だろうな!? 俺がそう思っていた瞬間。

ドッコーン!!!!!!!!!!

「「「!!!!!!!!!!」」」

突然孝達が居た場所が大きな爆発音が響き渡った。

「な、何だ!?!」

俺は爆発音が響いた場所を見るとそこにはゲシュベンストMK-2改(カイ仕様)のアーマーを装着した孝が居た。

「な、孝君！？そのアーマーは！？」

美鈴は驚いた表情をしていた。

「ああ良く分かんないけどミカエルがくれた物だ」

（ミカエルさん！？だからあんたは一体何考えているの！？）

俺は心の中で愚痴を言っていると。

「淳！！俺も手伝う！！ 奴らを倒すぞ！！」

そう言い孝は 奴ら に攻撃を開始した。

「まったく…、美鈴！！敏美！！孝に遅れるを取るんじゃないぞ
！！」

「うんわかった！！」

二人とも頷き 奴らを倒していった。そして数分後 奴らは
全滅して俺達は親子の居る場所へ向かった。

「あの、大丈夫ですか？」

敏美が聞くと父親は「大丈夫です。ありがとうございます皆さん」と言いお礼をしてきた。

「ほらっ、ありすもお礼を言って」

父親に言われて少女もお礼を言う。

「うん、お兄ちゃん、お姉ちゃんありがとう！」

ありすがお礼を言った後俺は。

「みんな早く移動するぞ。また 奴らが来るかもしれないからな？」

俺の言葉にみんな頷きマンションに向かった。ちなみにここの住人には悪いけど支援砲撃マーカー（投ごう型）を投げ込んでおいた。後はこのスイッチを押すだけ……ニヒヒッ

その後、俺は孝に武器を見せてもらった。

ゲシュベンストMK-2改（カイ仕様）

リープ・ミサイル

ファンナウト・ミサイル

F2Wキャノン

ジェッド・ファントム（必殺）

究極！ゲシュベンストキック（必殺）

追加武器

G・リボルヴァー

M13ショットガン

メガ・ビームライフル

HIVビームカッター

以上

……何故近接戦闘用の機体に射撃仕様のF2Wキャノンがあるんだ？さらに言えばゲシュベンストMK-2S型の必殺技があるんだ？

そして俺達は無事マンションに着き（孝がアーマーを装着して戻って来た時はみんな驚いていた）脱出の準備をし始めたが…、まさかのアクシデント発生！！なんとハンビーのガソリンがまったく無い状態だった！！

「ちよつと！？何でハンビーにガソリンが入って無い訳！？」

「わ、私に聞かれても」（汗）」

沙耶は鞠川先生に積みよっていた。

「淳どうすんだ？この人数じゃあ歩いて行くのは危険だぞ」

冬木が俺に聞いた。確かに、この人数じゃあ歩いて行くのは無理だな。ん、まてよ…そうだ！！あれがあるじゃんか！！俺はすぐに支援補給マーカー（設置型）を取り出しあるものを取り寄せた。

「？秋月さん何やってるんですか？」

美雪の言葉にみんなこっちを向いた。

「まあ見てな…ってもう来たのか」

みんなが俺の向けている方に顔を向けるとそこにはバルーンにぶら下がった一台の装甲車がこっちに向かってきた。

「おい淳…あれって…」

「ああMSFの所有する装甲車だ」

俺は森田の問いに答えていると、装甲車は支援補給マーカー（設置型）が置いてあった場所まで来ると破裂して落ちてきた。

ばんっ…ヒュルルル…ドッコーン！！！！

みんな唾然とした表情をしていた。俺の取り寄せた装甲車を見たコータは。

「ウツショーイ！！」

……また踊っていた。

「ちょっと淳！？これって旧式の装甲車じゃない！？しかも何で一台しか持って来ないの！！これじゃあみんな乗れないじゃない！？」

沙耶は俺に詰め寄って来た。まあ確かにこの装甲車…LAV…type Gは旧式かもしれないが中身は全然違うのだよ。

「確かに旧式かもしれない…まっ、とにかく見てみなさい」

俺に言われみんなが中を見て驚いていた。まあそりゃ驚くよな、だって装甲車の中にシステムキッチンやトイレ、シャワールーム、ベットがあるのだから。

「…ねえ、何か物理的法則を無視して無い？」

「そりゃそうだよ。なんせ四次元空間を使用して中の広さをこの装甲車の約10台分の広さにしてるんだもん」

「マジかよ！？一体MSFの技術は何処までいつてるんだよ！？」

「…少し目眩がした…」

俺が言っていると森田は驚ろき、麗が呆れていた。

「まあ、これで移動手段が出来たのだ。みんな荷物をこの装甲車に積むぞ」

冴子の指示でみんな荷物を積み始めた。ちなみにあの親子、ありすと鉄二（父親の名前）は一緒に取り寄せたネオMOSS迷彩服に着替えている。

くしばらくお待ちくださいく

しばらくして希里親子は着替え終わりみんなの方も荷物の積み込みが終わったようだ。

「よしっ！みんな早く乗ってくれ！そろそろ出発するぞ！」

俺が言うとみんな装甲車に乗り始めた。この装甲車の運転席は丁度真ん中辺りにあり俺が運転する形になる。その両隣には美鈴と敏美が座っている。そしてみんなが乗り終えて俺はアクセルを踏み装甲車を走らせた。最初の目的地は沙耶の家と決まり俺達は川の方へ向かって行った。

原作キャラ紹介（前書き）

今回は原作メンバーの紹介します。

希里親子の武装一覧

希里ありす

（アサルトライフル）

無し

（ハンドガン）

無し

（ショットガン）

無し

（サブマシンガン）

無し

（スナイパーライフル）

無し

（マシンガン）

無し

（ミサイル）

無し

（その他）

無し

希里鉄二

（アサルトライフル）

無し

（ハンドガン）

無し

(ショットガン)
無し
(サブマシンガン)
無し
(スナイパーライフル)
無し
(マシンガン)
M 6 0
M 6 3 A 1
P K M
M G 3
M 1 3 4 ガドリング機関銃
(ミサイル)
無し
(その他)
無し

原作キャラ紹介

小室孝（能力者）

原作メンバーの一人で主人公。原作ではみんなをまとめるリーダーだが本作では淳をリーダーと認めており孝のポジションは副リーダーみたいな感じ。最初は麗との仲は悪かったが永が 奴ら になってしまつて葬つたさい麗に怒りぶつけなれ一人で 奴ら を倒すため出ていこうとしたが麗に止めなれ出ていくのをやめた。その後、麗との仲は良くなっている。武装面は主にショットガンを装備している。第九話でミカエルから能力を貰いゲシュベンストMK-2改（カイ仕様）のアーマーを装着出来るようになった。

宮本麗

原作メンバーの一人でヒロイン。孝とは幼なじみで小さい頃に結婚を約束するほど仲が良かったが留年した事をきっかけに仲が悪くなつてしまいやさしくしてくれた永に惹かれ恋人になったが原作どうり永が 奴ら になってしまいい永を葬つた孝に怒りをぶつけたが孝のとつた行動を必死止めた。現在は孝の仲は良くなっている。武装面では女子の中で唯一ミサイル兵器を装備している。

平野コータ

原作メンバーの一人。見た目はデブでオタクぽい感じたが世界が崩壊した後、持ち前の武器知識でみんなに武器の説明をしたり、釘うち機を改造して 奴ら を倒していった。沙耶に対して恋愛感情

を抱いている。武装面では主にスナイパーライフルを装備しており何故かレールガンを持っている。

高城沙耶

原作メンバーでもう一人のヒロイン。孝や麗とは幼なじみで孝に対して恋愛感情を持っているがなかなか素直になれないツンデレ。武器では主にハンドガンやサブマシンガンを装備している。

毒島冴子

原作メンバーでもう一人のヒロイン。剣道の腕は一級品で木刀で奴らを倒していたほどだが、人を痛めつける事がたまらないと言う異常なせい癖がある。後、少し抜けたところがあり合う服がないと言う理由から裸エプロンをしていた。武装面では標準装備以外装備していないが淳からシシオウブレードを譲り受けた。

鞠川静香

原作メンバーの一人。藤美学園の保健の先生で 奴ら に襲われそうになっていた所に冴子よって助けられた。天然だが医療に関しては一級品。武装面では何故かショットガンやサブマシンガンを装備している。

森田

サブキャラの一人。原作では 奴ら に噛まれ 奴ら になっ

たが本作では淳に接触したため 奴ら に噛まれずにすんだ。武装面では主にマシンガンやミサイルなどの重火器を装備している。

上条美鈴（能力者）

サブキャラの一人で本作のヒロイン。原作では敏美と共に 奴ら に噛まれ 奴ら になってしまった。本作では淳によって助けられたため 奴ら になっていない。第三話でミカエルによってヒュッケバインMK-2のアーマーを装着出来るようになった。自身を助けてくれた淳に対し好意を持っており第八話で敏美と共に告白しており淳の彼女になった。

二木敏美（能力者）

サブキャラの一人で本作のヒロイン。原作では美鈴と共に 奴ら に噛まれ 奴ら になってしまった。本作では淳によって助けられたため 奴ら になっていない。第三話でミカエルによってビルドビルガーのアーマーを装着出来るようになった。美鈴同様自身を助けてくれた淳に好意を持っており第八話で美鈴と共に告白しており淳の彼女になった。

卓造

サブキャラの一人。原作ではバスで脱出するため逃げていたが 奴ら に捕まり噛まれてしまった男子生徒。本作では噛まれそうになった所で淳によって助けられた。その為淳に対して信頼しており彼をリーダーとして認めている。自身の彼女である麻と一緒に行動し

ている事が多い。武装面では全メンバーの中でアサルトライフルを多く装備している。

麻

サブキャラの一人。原作では自身の彼氏である卓造が 奴ら に噛まれてしまったさい自分も卓造の後を追うように噛まれて 奴ら になった女子生徒。本作では卓造は淳によって助けられたため生きている。その為卓造同様彼に対して信頼している。ちなみに名前は作者が考えたものである。武装面では主にサブマシンガンを装備している。

美雪

サブキャラの一人。原作では卓造達と共に逃げバスの中で紫藤の演説によって彼の信者になった女子生徒。本作では紫藤の信者にならず淳のメンバーになっており彼に対して恋愛感情みたいなものを感じている。ちなみに名前は麻同様作者が考えた物である。武装面では女子の中で唯一スナイパーライフルを装備している。

冬木

サブキャラの一人。原作では紫藤と共に逃げていたが足首を捻り助けを求めたが紫藤に顔を蹴られ悶えている所で 奴ら に噛まれてしまった男子生徒。本作では紫藤が蹴る前に淳によって助けられたため生存している。その為淳に対して信頼をしており彼と共に行動している。ちなみに名前は麻や美雪同様作者が考えた物である。武

装面では主にショットガンやミサイルなどを装備している。

一樹

サブキャラの一人。原作では卓造達と共に逃げておりバスの中で紫藤の演説によって彼の信者になるも彼の行動に異議を唱えたが他の紫藤信者によってバスの外に放り出され 奴ら に噛まれてしまった男子生徒。本作では美雪同様、紫藤の信者にならず淳達と共に行動している。ちなみに名前は麻や冬木、美雪同様作者が考えた物である。武装面では森田同様重火器を装備しておりコータ同様何故かレールガンを装備している。

希里ありす

原作メンバーの一人。原作では最初の夜を父親と共に逃げていたが父親を目の前で殺され 奴ら に襲われそうになっていた所で孝達に助けられた少女。本作では父親はコータ達によって助けてもなかった。武装面ではMSFメンバーで唯一標準装備以外装備していない。

希里鉄二

サブキャラの一人。原作では最初の夜でありすと共に逃げており住人に助けを求めたが逆にその住人に殺されたありすの父親。本作では殺されそうになった所をコータ達によって助けられた。名前作者が考えた物である。武装面ではマシンガン系を装備している。

第十話 戦場を舞う超音速の妖精（前書き）

第九話出てきた装甲車の説明です。

LAV - type G （MSF改良型）

MSFで多く作られている装甲車。一応旧式だが改良により現在の装甲車を圧倒する能力を持っている。

武装

GNバルカン

GNミサイルポット×8

ソニック・ブレイカー発生装置×2

移動能力

タイヤによる移転

ホバー機能

特殊システム

PS装甲

G Nドライブ

G Nフィールド

対E M P処置

以上

なお今回は新しいオリジナルが出ます。

第十話 戦場を舞う超音速の妖精

俺達はあるあとストライク（装甲車の名前で淳が命名）で移動していた。ちなみに支援砲撃マーク（投ごう型）を投げ込んでおいた家はみんな眠りに着いた後マークのスイッチを押しておいた。その数秒後その住宅にアウター・ヘブンから発射された砲弾は見事当たり 奴ら を引き付ける事が出来た。ちなみにあそこに引き込まっていた住人はカズに確認した所、砲撃が当たったさい慌てて逃げ出したが 奴ら の餌食になったらしい。まあ、いいきみだけどしばらくして川に着いたストライクはそのまま進んだ。ちなみにこの装甲車はホバーでの移動が可能で主に川や海の上を移動するさいに使用する（普段はタイヤで移動する）。俺が後ろを見るとコータとありす、沙耶以外はみんな眠っている。そして美鈴と敏美は俺の肩に寄り添うように眠っている、美鈴：敏美：寝顔が可愛い：／／／／／すると上の方から歌声が聞こえてきた。声からしてありすだろうしかも英語だ。

「Row、row、row、your boat Gently
down stream、Merrily、merrily、m
errily、merrily、Life is but a d
ream
」

へー、あの年で英語歌えるんだ。しかしコータの顔が悪人面してるような…。

「じゃ、今度は替え歌だ」

「うん！」

…おい、まさか！！

「Shoot、Shoot、Shoot your gun
kill them all now！BANG！BANG！BANG！
G！BANG！Life is but a dream、（
訳 撃て撃て撃てよみんなぶつ殺せーバン！バン！バン！バン！あ
ーたまんね！）」

やりやがったー！？おい一体何小学生に変な歌教えてるんだー！！

「そのデブヲタ！子供にろくでもない歌を押しえるんじゃない
！！」

あつ、沙耶に怒られてる。そんなことやってるまに向こう岸に着
いた。一度ここで最終確認をする。

「これからどうするんだ？」

「そうね…確か高城さんの家ってここから近いの？」

冬木の言葉に美雪が沙耶に聞いた。

「ええ、そうよ」

「よし、じゃまず高城の家に向かおうか」

俺の言葉にみんな頷きストライクに乗り移動を開始した。

↓それから5分後↓

「わっ！ここにも 奴ら がいやがる！」

「こっちもよ！何で東坂二丁目に近づくほど 奴ら が居るのよ！」

何故か知らないが沙耶の家に近づくほど 奴ら が増えているのだ！

「クソッ！淳！どうするんだ！？」

孝がアーマーを装着してM13ショットガンを放ちながら聞いてきた。

「ふっ、この装甲車を舐めるなよ！！行くぜ！！ブレイカーシステム起動！！」

そう言つとストライクの両脇かな先が尖つた何かが出てきた。

「食らいなっ！！ソニック・ブレイカー！！」

するとストライクの前面が光りフィールドが発生した瞬間、フィールドに接触した 奴ら が吹き飛んでいった。

「…やっぱりチートだよな？」

「そうか？……！！」

キキイイー……！！

俺は前方にワイヤーのような物が見え急いで急ブレーキをかけた。

「うわっ！何だ！何でこんなところにワイヤーがあるんだ！？」

「しるかっ！！みんな！！ 奴ら を迎撃するぞ！！」

俺の言葉にみんなそれぞれの武器で攻撃を開始した。俺と美鈴、敏美もアーマーを装着してすでにアーマーを装着して戦っている孝の援護に向かった。

「行けっ！！ソリッドソードブレイカー！！スラッシュ・リップ
ー！！」

キュイイイイー！！！！

ズバッ！！ズバッ！！ズバッ！！ズバッ！！
フシュッ！！フシュッ！！フシュッ！！
バキューン！！バキューン！！バキューン！！バキューン！！

「リニアミサイルランチャー発射！！」

パスッ！！パスッ！！パスッ！！パスッ！！
ドッコーン！！ドッコーン！！ドッコーン！！ドッコーン！！

「グラビトン・ランチャー！！」

ドッコーン！！！

キュルルルルル！！！！！

「リープ・ミサイル！！発射！！」

パカッ！！パスッ！！

ドッコーン！！ドッコーン！！ドッコーン！！ドッコーン！！ドッコーン！！ドッコーン！！

ダダダダダダダダダッ！！！！！！

俺達は 奴ら を迎撃していくが、何故か減るところが増えている。

（クソッ！！このままじゃ俺達とはかく後ろにいるみんなが危ない！！どうすれば！！）

俺がそう思いながら戦っていたなストライクの中が光っていた。

淳サイトエンド

ありすサイト

みんな外で戦っている。パパやお兄ちゃん達、お姉ちゃん達もみんな戦っている…。それなのに私は車の中で大人しくしている。私もみんなを助けたいけど子供の私は戦えるだけの力がない。

「……私…どうすればいいの…」

（それでしたら私が力を与えましょう…）

「!？」

突然私の頭の中から声が聞こえた。

（えっ！？誰！？）

（そんなに警戒しなくても大丈夫です。私大天使はミカエル、秋月淳達に力を与えた者です。貴女が望めばあの子達と同じ力を与えます）

だいてんし??みかづる??よくわかんないけど私もお兄さん達と同じ力が貰える。だから私は。

（おねがいミカエルさん！！私もお兄さん達と同じ力を！！）

（ええ、ではアナタに力を…）

そして私は光りに包まれた。

ありすサイトエンド

淳サイト

（何か嫌な予感が…）

俺がそう思っていたなその予想は当たった。何故ならそこにはフエアリオン タイプGのアーマーを装着したありすが居たからだ。

「あ…ありす！！その姿は！？」

鉄二が驚いていた。まあ、同然だろう。まさか娘がアーマーを装着しているのだから。

「それじゃありす…行くわよ」

「うん！りおんちゃん！」

するとありすととりおんは 奴ら に攻撃を開始した。 ってまさか！
？あれをやるつもりか！？

「コントロールをそっちに！」

「了解…ありす！」

すると二人はまるで踊りを踊るようにくるくる回り始めた。 …間
違いない！？あれをやるつもりだ！！

「パターンセレクト、R・H・B…エンゲージ！」

すると二人は飛翔し 奴ら に向かって加速し腕に装備されている
ソニック・スウェイヤーを起動させ左右に別れた。

「ありす！！」

りおんは近くにいた 奴ら を切り、ありすはソニック・スウエ
ィヤーで 奴ら を次々と切り裂いた。りおんは少し離れた所で踊
っていた。

「りおんちゃん!! そっち!!」

すると次にりおんが 奴ら を次々と切り裂き今度はありすが踊
っていた。しばらくするとありすとりおんは中央にいる 奴ら に
近づいた。

「シンクロ…アタック!!」

二人はくるくると回りながら切り裂いていった。

「りおんちゃん!!」

「ありす!!」

「ここであの決め台詞を言うのか!!」

「ロイヤル・ハート!!」

「ブレイカーだよ!!」

そして二人はソニック・ブレイカーを起動させ一気に 奴らを倒していった。…うわ、実際に見ると凄いな。

「よしっ！みんなありす達に遅れないように行くぞ!!」

それからありす達の活躍によって 奴らを全滅でき沙耶の母親が救援に来てくれた。

第十一話 高城邸（前書き）

ありすとりのんのお装一覧とりのんのお介です。

フェアリオンタイプG・タイプSお装一覧

アサルト・ブレード（共通）
バースト・レールガン（共通）
ロール・キャノン（共通）
ボストーク・レーザー（共通）
ソニック・スウェイヤー（共通） ソニック・ブレイカー（共通）
パターンRHB（共通・必殺）

フェアリオンタイプG タイプS追加武器一覧

ハイパー・ビームキャノン（G） ハウリングランチャー（G）
Gレールガン（G）
Gインパクトステーク（S）
シシオウブレード（S）
ブレード・トンファー（S）

人物紹介

希里りおん

ミカエルのお力で産み出されたもう一人のありす。姿はありすに似ており、髪の色は青く性格はスパロボOGのラトウーニに似てい

る。彼女はアーマーを装着している時のみ出現しアーマーを装着していない時はありすの中にいて、表のありすと話すことができる。フェアリオンタイプのSの武装は近接用が多い。

第十一話 高城邸

俺達はあるあと沙耶の母親である百合子さん達に助けられ今高城邸にいる。ちなみにストライクも高城邸の人達に回収してもらった。

「さてと…俺はストライクの整備でもしますか…」

俺は回収したストライクの整備をする為車庫に向かう。そこでは松戸さんがすでに整備をしていた。

「ん？ああ君は確か…」

どうやらこちらに気付いたようだ。俺は松戸さんに挨拶をした。

「初めまして。秋月淳です」

「おお、お嬢が言ってた異世界から来た子か！俺の名は松戸だよろしくなボウス。確かこの装甲車もその異世界から持ってきたて聞くんが？」

「ええ、そのストライクはMSFの技術で作った品物でそこいらの装甲車や戦車じゃストライクには敵いませんよ。しかしよく整備できますね…」

そう俺が気になっているのは何故松戸さんは初めての見るストライクの整備ができるのかだ。もともとMSF自体はミカエルから貰った物で技術面もミカエルの特典で最高技術なのだ。

「それなら簡単だ。たとえ技術が進んでも基本設計は同じだからな」

「成る程、それでストライクの整備が出来るんですね」

俺はその言葉で納得した。確かにいくら技術が進んでも基本設計は同じなんだったな…。俺は松戸さんと一緒にストライクの整備をする事になった。しばらく松戸さんとストライクの整備をしていると誰かが後ろから声をかけてきた。

「「淳」」

「ん？美鈴？敏美？どうしたんだ？」

声をかけてきたのは俺の彼女である美鈴と敏美だった。

「よく分かんないけど沙耶さんが呼んでるよ？」

「一体何だんだろうね？」

「そうだな……」

まあ、理由は分かるけどな。ストライクの整備を松戸さんに任せて俺達は沙耶のいる部屋に向かった。部屋の戸を開けるともうみんな来てたみたいだ。

「沙耶さんみんな来たみたいよ」

「ええ……、ありがとう麻……」

「それでどういうお話なの？」

鞠川先生はそう言いながらバナナの皮をむいていた。てゆうかどっから持ってきた。

「アタシたちがこれから先も仲間にいるかどうかよ」

沙耶の言ったことにみんな驚いていた。

「おい……仲間って……」

「当然だな。我々はいまより大きく結束の強い集団に合流した形になっている。つまり……」

卓造の言ったことに冴子が沙耶に聞いた。

「そう。選択肢は二つきり！飲みこまれるか」

「……別れるか。でも別れる必要なんてあるのか？」

孝がそう言うのと沙耶は当然窓を開けて俺達に言った。

「ここで周りを見わたせばいいわ！それで分かんなければ…アタシのこと名前で呼ぶ権利はナシよ！」

俺達は窓のベランダ出で周りを見わたした。外はもう地獄のような状態だった。もう外に生存者はいなく 奴ら だけになっていた。

「手際はいいようならアンタのオヤジは……」

「ええ凄いわ！それが傲慢だった。いまだってそう、こるだけの

ことを一日かそくらで。でも…それができるなら」

俺が言うことに沙耶が答えたが沙耶の様子がおかしい事が直ぐにわかった。沙耶は両親はすでにやられたと思っていたのだから多分精神のがたが外れてしまったのだらう。だから俺は…。

「おい！沙耶！！」

俺はアーマーを装着し沙耶の襟首を掴み持ち上げた。俺のとった行動にみんな驚いていた。

「あ……なによ、いきなり。でもようやく」

「おまえだけじゃない…ここにいるみんな同じなんだ」

「……分かったわ。分かったから放して」

沙耶にそう言いわれ手を離しアーマーを解除した。

「悪かったな…すまん」

「ええ本当に、でもいいわ。さ、本題に入らないと。あたしたち

は……」

沙耶が何か言おうとした瞬間外からエンジン音が響き渡った。見てみると入り口から沢山の車やトラックがはいってきた。

「あれは……？」

「そう。この県の国粋右翼の首領！正邪の割合を自分だけできめてきた男！アタシのパパ！！」

俺達は下の階へ向かった。

第十二話 右翼の首領（ドン）高城壮一郎！そして告げなれる想い（前書き）

何か……主人公がハーレム化してきたよいな……

第十二話 右翼の首領（ドン）高城壮一郎！！そして告げなれる想い

俺達が下に降りると何人もの部下と避難民がおり、そこへ檻に入った一人の男が運ばれてきた。檻に入っている男を見るとその予想からして 奴ら になっているようだ。そう考えていたら。

「この男の名は土井哲太朗！四半世紀もの間共に活動してきた我が同志であり友だ！救出活動のさなか部下を救おうとし…噛まれた！」

と説明してきた。そう考えていると沙耶の父親は説明を続けた。

「まさに自己犠牲！人間として最も高貴な行為だ！！しかし……。彼はもはや人間ではない。ただひたすらに危険な”もの”へとなり果てた！」

ガシャンッ！！

突然檻の方からすごい音がした。見ると 奴ら 化した部下が檻にぶつかっていた。すると沙耶の父親が鞘から刀を抜いた。そして。

「だからこそ私は今……我が友へ最後の友情を示す！！」

そう言った瞬間檻の扉が開き 奴らが飛び出したが。

ズバッ！！！！

物凄い速さで刀を降り下ろし 奴らの首を切った。その後避難民に闘えと言いその場を後にした。

「刀じゃ効率が悪すぎる……」

見ていたコータがそう言った。

「決めつけがすぎるよ平野君」

「でも日本刀の刃は骨に当てたら欠けますし3・4人も切ったら……」

コータが冴子の言ったことに反論しようとしたが俺が間にわって入った。

「おいコータ、そこまでにしておけ」

「なっ！？淳何だよ！？」

「どうやらコータは熱くなっているようだ。少し頭を冷やしてもらおう。」

「確かに日本刀だとそう言う弱点はあるかもしれない、でもそれは素人の話だ。達人の場合だとそういったことが出来る。例えるなら銃と同じだ。例えどんなに優れた銃でも素人が使えばダダの無駄弾だがお前のような達人なら無駄弾を撃つ事がない。それと同じだ」

俺の説明を受けコータは頭が冷えたようだ。

「そうだな…ごめん」

「気にするな」

コータは謝ったが俺は謝んなくて言いと言ってみんなその場で解散した。

「ねえ、淳」

「ん？敏美どうした？」

「なんで平野君にああいうことを言ったの？」

敏美と美鈴が不思議そうに聞いてきたので答えた。

「ああ、そのことか…あの場合あ言わないとコータは暴走するからな。やっと自分に出来る事が奪われると思っていたからな…」

「成る程」

二人共納得したなし。しばらく三人で高城邸を歩いていると後ろから声をかけられた。

「秋月さん、少しいいですか？」

振り返るとそこにはネオMOSS迷彩服を着た美雪がいた。何だか真剣な表情をしていた。

「どうしたんだ？」

「いえ…できれば二人だけで話したいのだけど」

「？わかった。それじゃ二人共先に行っていてくれかないか？」

俺は二人そう言い先に行ってもらった。俺と美雪は近いの部屋に入った。

「それで？一体何の話だ？」

「…最近上条さんと二木さんとの仲が良いみたいですけど二人とは一体どういう関係なのかと思ひまして…」

ん？なんで美鈴と敏美との関係なんて聞くんだ？

「二人とも俺の彼女だけど」

「……そう…ですか…」

すると美雪はうつむくと少し肩を震わせていた。俺が顔を覗き込んだ瞬間驚いた。美雪が泣いていたからだ。

「へっ！？み、美雪！？一体どうしたんだ！？」

俺が慌てて聞いた瞬間美雪が俺の胸に飛び込んだ。

「え？み、美雪？」

「私、秋月さんのことが好きなんです！！」

……へっ？い、今何が言ったような……俺のことが好き？

「……美雪、今の言葉は一体……」

「そのままの意味です！！本当に私はあなたのことが好きなんです……！」

「と、とりあえず落ち着いて、まずどうして俺のことが好きなんだ？」

俺はとりあえず美雪を落ち着つかせてきいてみた。

「……まだ私達が学園にいたいさ！奴らに襲われそうになってもうだめだと思っていました。でも秋月さん達に助けられた。その時なんです、秋月さんのこと好きになったのは……」

「……それじゃあの時紫藤の方にいかなかったのは……」

「はい…秋月さんのそばから離れたくなかったんです……」

俺はどうしてあの時美雪が紫藤の信者にならなかった理由がわかった。美雪は俺のことが好きになってそばを離れたくなかった。それが信者にならなかった理由だとわかった。

「ええと…もう大丈夫か…」

「…はい、だいぶ落ち着きました…」

俺が聞くと美雪はそう言い俺から離れた。

「…ごめんなさい秋月さん…彼女がいるのにあのようなことを言っ
てしまって…」

「いや…別にいいんだけど…」

すると突然扉が開いたので驚いていると入って来たのは美鈴と敏美だった。

「淳。さっきの告白ちゃんと答えてあげて」

「そくだよ淳。ちゃんと美雪さんに答えてあげて」

「へ！？み、美鈴！？敏美！？もしかしてさっきの話し聞いていたの！？」

俺が驚いて二人に聞いた。

「だってあの時の美雪さんの顔、あの時の私達と同じ顔だったから」

「だから分かったの。美雪さんも淳のことが好きなんだって……」

「で、でも二人共秋月さんのこと……」

「だったら美雪さんも私達と同じように淳の彼女になればいいじゃないですか！」

「そくだよ美雪さん。美雪さんも淳の彼女なっちゃいなさいよ！」

美雪が言おうとしたが二人がそれをさえぎり物凄いことを言ってきた。……ってゆーか何言ってるの二人共!?

「上条さん!?!二木さん!?!な、何言ってるんですか!?!」

「だって、これじゃあ美雪さん可哀想だし……」

「だったら美雪さんも彼女になれば私達や美雪さんも幸せになるし結果オーライだよ!」

いや……確かにそうだけど……

「と言っ訳で……」

「どうなの淳? 答えは決まった?」

二人共が俺にそう言いながら詰め寄って来た。美雪も俺のことを見ている……あー!!! もう分かったよ!!!

「……分かった、美雪……こんな俺で良ければ付き合ってください」

「はい！ありがとうございます秋月さん！！」

そう言っ て美雪は俺に抱きついてキスをした。

「あー！！美雪さんズルイ！！私も！！」

「ちよっ！！敏美ズルイ！！私も！！私も！！」

「ちよっ！お前達少し落ち……ムグツ！？」

こうして俺は美鈴と敏美だけでなく美雪も俺の彼女になった。まあ、原作じゃ無理矢理のデИБキスだったし俺達と一緒に来たことが彼女の運命を変えなれたかな別に良いか。その後原作どおりコータが壮一郎さんの部下に武器をよこせと言っていたが俺達や壮一郎さんの出現によって何とか無事に終わった。

第一三話 EMP攻撃!! (前書き)

少しパクリ有り……済みませんm(――)m

第一三話 EMP 攻撃！！

俺達はコータを助けた後、今後のことを考えてみんなで相談した結果俺は今壮一郎さんの所にいた。

「親御さんを探し出すと？家に帰るのでわなく？」

「そうだ。俺のメンバーみんな自分の家族のことが気になっているかなら、だから俺達は壮一郎さんとは別行動になります」

そうなのだ。みんな自分の家族は大丈夫なのか心配しているのだ。だから俺達の考えは壮一郎さんの安全な場所への移動とはまったく違うのである。

「ふむ。探したしたあとはどうするつもりだ？」

「俺のいた世界の基地が一緒にこつちの世界に来ているのでそこにいくつもりです。人数が多い時はみんなを守りながないきたいと思います」

「…はっはっはっ！なんと仲間思いな男だ！やりたいようにやるがよい！」

壮一郎さんとの話しを終え外で待っていた美雪と共にみんなの所に向かっている。

「そう言えば美雪。アーマーの調子はどうだ？」

「ええ、今のところは調子はいいです。…確かライン・ヴァイスリッターですね？これはすごい力ですね」

じつはあのあと、ミカエルが美雪にも力を与えライン・ヴァイスリッターのアーマーを装着出来るようにしたのだ。まったくミカエルは一体何考えているんだか。

「そう言えば驚いたと言えば小室さんの方も驚きましたね。小室さんいつの間に宮本さんと沙耶さんと付き合っていたのでしょうか？」

そうなのだ。孝はいつの間にか麗や沙耶と付き合い合っていたのだ。てゆうかいつの間に（汗）。ちなみに美雪のアーマーの武器はこんな感じ。

ライン・ヴァイスリッター武装一覧

3連ビームキャノン

ネオ・プラズマカッター

スプリット・ミサイル

ハウリングランチャー（Bモード）

ハウリングランチャー（Eモード）

ハウリングランチャー（Xモード、必殺）

追加武器

メガ・ビームライフル

M90アサルトマシンガン

ハルバートランチャー

シシオウブレード

以上

こんなことを話しているうちに孝達が待っている広場に着いた。

「みんな集まっているか？」

「ええ、みんないるよ」

俺が聞くと麻が答えてくれた。一応ストライクの整備は完了して
いていつでも出られる準備が出来ていた。

「それじゃさっそ…「あーっ！」って、何だ!？」

突然鞠川先生が大声を出したので驚いていた。

「やったやった おもいだしたあ！！うん！うん！絶対にそう！間違いはないわ！！」

……なんか喜んでいる。

「どうしたの先生？…うぷ」

突然喜んだ鞠川先生に聞いていたありますが鞠川先生に抱きつかれ顔を胸に押しつけれていた。ちなみに俺や孝、卓造、鉄二さん、女子以外の男子はみんな（ありす…ずるい…）と思っていたのは言うまでもない。

「お友達の電話番号おもいだしたの！自分の携帯も手帳も持ってこられなかったから今までおもいだせなくて……」

どうやら鞠川先生の友達の電話番号を思い出したようだ。さっそくかけるため孝の携帯を借りようと思った瞬間突然麗が正面玄関のある方へ走っていった。突然の行動にみんな驚いていたがその理由がわかった。何故ならそこにいたのはなんとあの馬鹿教師もとい紫藤がいたからだ。そんなことを思っていたなもう麗が銃剣を紫藤に向けていた。

「ずいぶんとご立派じゃない。紫藤せ・ん・せ・い？」

「み、宮本さん。ご無事でなにより……」

突然のことで紫藤や紫藤信者の奴らもどう対処していいか分かんないようだ。

「私がなんで槍術が強いかわってる？銃剣術も教わっているからよ！県警の大会じゃ負け知らずのお父さんに……！」

「全て書くと少々長くなるので壮一郎さんが紫藤や紫藤信者を追いつ返して鞠川先生が孝の携帯でリサの携帯番号を押している最中まで略します」

「えーと、1がここで、2がここで、3がここで……」

……鞠川先生番号押すの遅っ！！まさかここまで遅いとは……

「……代わりに押しましょうか？」

「分かんなくなるから邪魔しちゃダメエ」

あまりの遅さにコータが言ったが鞠川先生は拒否して押し続けていた。しばらくしてやっと終わったようだ。

ブルルルルルル………ガチャ

《もしも……》

……繋がったし！！

「あーリサあ？生きてたねー！あたしもいろいろと大変だったんだけど」

どうやら友達が無事で嬉し泣きしているようだ。しばらく話していたが俺はここであることに気付いた次の瞬間、辺りが一瞬明るくなった。

「え？もしもし？もしもしリサあ？」

「なんでエンジンがかかんねんだ！」

「あなた！あなた！いきなりどうしたの？」

「停電と同時にP Cが全部死にました！」

あちこちから怒声が聞こえてきた。やっぱりEMP攻撃のようだ。

ビーー！！ビーー！！ビーー！！

アウター・ヘブンからの通信がきた。通信用のインカム（EMP対策済み）から着信音が辺りに響き渡った。周りにいる俺のメンバーや壮一郎さんの部下の人や避難民がその音に気付いてこちらをみたが俺は一応無視し通信に出た。

ガチャ

「こちらスネーク！」

《大変だボス！！ロシアの馬鹿共が核ミサイルを撃ちやがった！！》

ちなみにこの通信は周りにいる人達にも聞こえている。

「……それで？ロシアの馬鹿共は何発撃った」

「4発ほど撃ったがそのうちの3発を自衛隊とアメリカのイージス艦が迎撃したが残り1発の迎撃を担当していたアメリカのイージス艦　カーティス・ウィルバー　の隊員の一人が　奴ら　になつてしまつて乗組員が全滅、その核ミサイルは高々度核爆発を引き起こしてEMP攻撃を引き起こしやがった！！多分ボスのいる地域の電子装置は全滅しているはずだ！！」

「ちっ！まったくロシアの馬鹿共！！余計なことをしやがって！！俺がそう思っていたな正面門から悲鳴が聞こえてきた。」

「入ってきたあああ！！来るなあ！来るなあ！……ぎゃあああああ……！！！！！！！！」

「何とかここまで逃げて来た部下がそこで　奴ら　の餌食になつたようだ。」

「門を閉じよ！急げ！警備班集合！死人どもを中に入れるな！」

「いつも間にか壮一郎さんがそこにいて指示を出していた。」

「会長！それでは外にいる者たちを見捨てることに！」

「今閉じねば全てを失う！！やれ！！」

壮一郎さんの命令で門を閉めていった。すると部下の一人が近寄ってきた。

「会長！奥様！獲物をお持ちしました！」

すると百合子さんがそれを装備した。てゆーか格好がすごい……。その後、壮一郎さんにも銃を渡そうとしたが無用といいその銃を沙耶に渡した。その後、俺達のメンバーはストライクのある格納庫へ向かった。

「ねえ淳！ストライクはちゃんと動くの！？」

「MSFを舐めるなよ！EMP対策はちゃんとやってあるから大丈夫だ！！」

孝が心配して聞いたが俺の答えを聞いて安心した表情をした。

「松戸！？ストライク今出せる！？」

「ええお嬢大丈夫ですぜ！ちゃんと動きます！しつかしすごいなあストライクは、ちゃんとEMP対策をしてるんだから！」

みんながストライクに乗り込んだが俺と美鈴、敏美、美雪は乗り込まないので孝が大声で言ってきた。

「淳！？何やってるんだ！？早く乗れよ！？」

「悪いが孝。俺達はここに残る」

俺の言葉にみんなが驚いていた。

「ちよつ！？淳何言ってるんだ！？」

「俺達はこれから沙耶の親子と部下、それに避難民を助けに行く。お前達は早く自分のご両親を見つけてこい！！早く！！」

俺の言葉に孝達は驚いたがすぐに沙耶が「絶対に生き残って！！もし死んだら承知しないわよ！！」と言い、鞠川先生に（運転方法を一応教えておいた）出すように言いみんなを乗せたストライクはソニック・ブレイカーを起動させ 奴らを吹き飛ばしながら脱出していた。

「…さて済まないなみんな。俺のわがままに付き合わせて……」

俺は一緒に残ってくれた美鈴達にそう言った。

「ううん、別に良いよ」

「私達もあの人達を助きたいし」

「それに壮一郎さんにもいろいろとお世話になりましたから」

「済まないね淳の旦那に嬢ちゃん達」

俺達のことには謝る松戸さん。さーて……派手に行きますか！俺達はアーマーを装着し壮一郎さんのいる正面門に向かった。ちなみに俺達のアーマーを装着を見て松戸さんが驚いていたのは言うまでもない。

第十四話 必殺！！ランページ・ゴースト！！そして高城邸脱出！！

俺達が正面門に着くと壮一郎さんと百合子さん、5人の部下、12人の避難民達が周りにいる 奴ら と戦っているが流石に数が多い。

「よしっ！！美鈴！！敏美！！美雪！！壮一郎さん達を援護するぞ！！松戸さんも出来るだけ俺達から離れないようにしてください！！」

「「「わかった！！」」」

「わかりやした！！」

俺はGNドライブから粒子を噴射させ一気に加速した。

「それじゃあ行くよ敏美！！美雪さん！！」

「「ええ！！」」

美鈴が言い敏美と美雪はすぐに武器を構えてそして。

「F2Wキャノン!!」

「ハウリングランチャー!!」

「Eモード発射!!」

俺の後ろから銃声がしたが多分美鈴達が攻撃を開始したのだろう。すると俺の横を強烈なビームが通り過ぎ壮一郎さん達の周りにいた奴らは一瞬で消滅した。壮一郎さん達は何が起こったのか分かってないようだ。さて、ここに来て初めて使うがまあ良いだろう。

「こちらもジョーカーを引かせてもらおう!!」

そして俺はここに来て初めて使うSEEDを発動させエリアル・クレイモアを発動させた。

淳サイトエンド

壮一郎サイト

どうやら娘達を乗せたストライクが門を突破していったようだ。

「行つたか？」

「ええ、私たちの娘が……愛すべき若者たちと共に！」

わたしの問いに百合子が答える。周りには部下と避難民がいる。そして更に周りには死人共がいる。多分もうだめだろう、わたしは部下と避難民達を見たどうやら覚悟を決めたようだ。

「もはや後顧の憂い無し！！！」

わたしの言葉に部下や避難民が死人共に攻撃しようとした瞬間。

「『Eモード発射！！！！』」

突然後ろから声を聞いたと同時に我々の横を強烈な光が通り過ぎ周りにいた死人共に当たり一瞬で消滅した。何が起ったのか分かなかったが次の瞬間。

「こちらもジョーカーを引かせてもらっ！！！」

聞き覚えのある声が聞こえ後ろを向こうとした瞬間、我々の横を何が通り過ぎた。慌てて前を向くとそこにいたのは……。

壮一郎サイトエンド

淳サイト

俺は壮一郎さん達の横を一気に通り過ぎ 奴ら に攻撃を開始した。まず5連チェーニングガンを使い近くにいた 奴ら を抹殺し次にプラズマホーンを起動させそのまま 奴ら を真つ二つにし更にリボルビング・バンカーを一体の 奴ら の腹に打ち込み吹き飛ばした。吹き飛ばされた 奴ら はそのまま近くにいた 奴ら を巻き込んでいった。そして留めるとばかりに両肩のハッチを開きアヴァランチ・クレイモアを発射し 奴ら を全滅させた。

「ジョーカー……切らせてもらった……」

決め台詞を言い俺は壮一郎さん達の方を向いた。

「みなさん大丈夫ですか？」

「えっ！？その声もしかして淳君！？」

「ええ、秋月淳です」

俺の声を聞いて百合子さんが驚きの声をあげ他の人達も驚いていた。更に後ろからやってきた美鈴達にも驚いたようだ。

「松戸！？お前生きていたのか！？」

「ええ、淳の旦那や嬢ちゃん達に助けられて、おかげでこのとりピンピンしてまっせ！」

部下の一人と一緒にこつちに來た松戸さんに驚きの声あげ松戸さんも元気な声あげた。さてと…それじゃあさっさと脱出を……

アアアアアアア……………

ってまだいたんかい！？

「クッ！？淳どの一体どうするんだ！？」

壮一郎さんが俺に聞いてきた。うゝん……………確かにこの状況をどうやって打開しよう。しばらく考えているとあることが思い浮かんだ。

ニヤリ……

「よし、美雪……あれをやるぞ……」

俺の声を聞き美雪は一瞬驚いたがすぐにニヤリと笑った。

「ええ、わかりました秋月さん……」

突然ニヤリと笑った俺達に美鈴や敏美に壮一郎さん達も驚いたが
あえて無視してある作戦を開始した。

「よし美雪！！打ち合わせ通りに行くぞ！！」

「わかりました！！秋月さん！！」

俺はブースターを開き加速した。

「それじゃ、弾幕を張ります！！」

そう言つと美雪がハウリングランチャーをEモードにして大量に
発射した。そのビームに当たった 奴らは次々と消滅していった

が更に俺が上からプラズマホーンを起動させながら降下しそのまま
奴ら を真つ二つにした。

「更に行きます!!」

いつの間にか 奴ら の後ろにいた美雪が今度はハウリングラン
チャーをBモードに切り替えて発射し 奴ら を次々と迎撃した。

「まだだっ!!」

俺がアヴァランチ・クレイモアを発射し 奴ら を次々と消滅さ
せていった。そして一体だけ残った 奴ら に一気に加速しそいつ
の前までいきそして俺はリボルビング・バンカーを、美雪はハウリ
ングランチャーをXモードに。

「美雪!!ここに撃ち込め!!」

「これで終わりにします!!」

俺が 奴ら にバンカーを撃ち込み上に向けた瞬間、美雪がそこ
にハウリングランチャーを発射しそのまま俺は上昇し美雪もそのま
ま降下した。

「ハアアアアアア！！！！！！」

そのまま俺と美雪はぶつかりそうになる瞬間、すれ違ってそのまま奴らを倒していった。

「これが俺達の！！」

「切り札です！！」

そして俺と美雪は決め台詞を言った。

「ちよっ！？淳！？今の一体何っ！？」

あまりのことに慌てて敏美が俺に聞いてきた。

「ん？ああ、あれはランページ・ゴーストって言って……」

俺はみんなに説明していると壮一郎さんが俺のところやってきた。

「淳どの我々を助けてくれてありがとう」

「いえ構いませんよ。俺は沙耶にあなた達を助けると言いましたから」

「そうか……ではこのあとはどうするんだ？もし移動するならこれだけの人数をどうするんだ？」

「確かにそうですね……まあ大丈夫ですけどね」

俺はすぐに支援補給マーカー（設置型）セットしあるものを取り寄せた。俺の行動に美鈴達以外のみんなが不思議がっていると。

バババババババツ

突然のプロペラ音に壮一郎さん達が驚いたようだ。

「淳、来たよ」

敏美の指を指した方を向くとそこにはこちらに向かってくる一台の装甲車があった。

「淳どの、あれは……？」

「まあ、すぐにわかりますよ」

そうこうしている内にそれが支援補給マーカー（設置型）が置いてあった場所まで来るとバルーンが破裂して装甲車が落ちて来た。

バン！！……シュルルルル………ドッコーン！！！！

「……またすごい物を取り寄せたね」

ちなみに今回取り寄せたのはLAV - type Cという孝達が乗っていたストライクとは少し違う物だ。

「まあ、これで移動しましょう。っとその前に壮一郎さん達にはこれに着替え下さい」

俺は一緒に取り寄せたネオMOS迷彩服をみんなに着替えるように指示した。最初は避難民の人達はイヤがったがこの服のことを説明するとみんなすぐに着替え始めた。

くしばらくお待ち下さいく

壮一郎さん達の着替えが終わりみんながインパルス（装甲車の名前で淳が命名）に乗り込んだ。中の広さに驚いたが何とかみんな入った。

「それじゃ淳君。もう出しても良いわよ」

「了解。それじゃ行きます！」

こうして俺達は高城邸を後にした。

第十五話 警察署へ！！新たな生存者達（前書き）

LAV - type C の紹介です。

MSF が所有する装甲車で LAV - type G に戦車砲を付けた物。この装甲車も旧式だが MSF の技術により現在の装甲車を圧倒することができる。

武装

GN バルカン × 2

GN ミサイル × 8

GN レールガン

GN ビームキャノン（GN レールガンと切り替えて使う）

ソニック・ブレイカー発生装置 × 2

追加システム

GN ドライブ

GN フィールド発生装置

GN ジャマー

PS 装甲

ホバー走行

内部の広さ

二階建ての家が二件分入るぐらい広い

第十五話 警察署へ！！新たな生存者達

俺達は高城邸を脱出してしばらくたつた後、話し合いでまず警察署へ行くことになった。その間に美雪が避難民や部下の人達に俺の素性とマザーベースのことを説明している。みんなが俺の正体を知った瞬間驚いたがマザーベースの話を聞いて嬉しそうな顔をしていた。すると運転していた俺の所に壮一郎さんがやってきた。

「淳君、一つ聞きたいがその二人とあっちの娘は君の彼女なのか？」

「えっと…… / / / /」

「私達は…… / / / /」

「その…… / / / /」

突然の問いかけに美鈴達が顔を真っ赤にしていた。

「ええ、そうですよ。とゆうより三人共愛していますから」

「「「ちよっ！ー！淳！ー！（秋月さん！ー）」」」

俺の言ったことに三人共さっきより顔を真っ赤にしながら詰め寄って来た。

「おっ、何だ何だ？兄ちゃんはおモテモテだね」ニヤニヤ

「なかなか良いカップルじゃない」ニヤニヤ

「アツアツだね」ニヤニヤ

後ろで話を聞いていた部下の人達や避難民達がはやしたてていた。

「はっはっはっは！！！仲の良い四人だな！！」

壮一郎さんは盛大に笑っていた。

「高城会長も笑わないで下さい！！！！」

「いやあ、スマンスマン、だが恥ずかしがることはない。君達三人で彼を支えてやってくれ」

「「「はっ、はい！！！」「」」

そんな話をしている内に床主警察署の近くまで来たが俺はある疑問を感じていた。

「何か変だな……」

「どうしたの？」

「いや…何でか知らないが自衛隊のブラックホークが墜落してるんだが」

どういつ訳か三機のブラックホークが床主警察署の近くに墜落していた。

「淳の旦那、もしかすると何かの任務でこの近くに来たときにEMP攻撃を食らって墜落したんじゃない……」

「かも知れないな…それじゃちょっと見てき…」「バン！！バン！！バン！！」って、何だ！？」

突然の銃声が響き渡った。

「淳！！今の銃声警察署の方から聞こえたよ！！」

「もしかすると生存者かもしれません！！」

敏美と美雪がそう言っている間も銃声が聞こえてくる。

「ちっ！！松戸さん！！運転変わってください！！俺は美鈴達と先に行って助けてきます！！」

「わかりやした！！」

俺は松戸さんにインパルスの運転を任せアーマーを装着して美鈴達と先に警察署へ向かった。

（くそっ！！無事でいてくれよ！！）

そして警察署の上空に到達すると下では自衛隊と思われる人達が奴らと戦っていた。

「何とか間に合ったね！」

「ああ、それじゃ援護を「キヤアアアアア」!!!」!!!?」

悲鳴が聞こえたほうを見ると一人の女性隊員が 奴ら に襲われそうになっていた。

「ちっ!!!させるか!!!」

俺はGNドライブから大量のGN粒子を放出させそして。

「究極~~~~!!!ゲシュペンスト~~~~!!!キッ~~~~ク!!!!!!」

そう言っ て 奴ら の顔面に蹴りを入れた。

淳サイトエンド

?????サイト

私の名前は星井三沙大佐。^{ほしい みさ}陸上自衛隊レディース小隊の隊長をつとめている。生存者の救出と言う任務に勤めていたが任務中に突然へリが故障してしまい墜落してしまった。

「くっ、みんな大丈夫!!?」

「こっちは全員無事です!」

「こっちもよ!でも何人が怪我をしているわ!」

私の呼びかけに全員答えてくれたが墜落のショックで何人が怪我をしたようだ。

「雨宮軍曹!ここから警察署までどれくらいかかる!」

「はいっ!ここからだと数分の距離だと思います!」

「よし、それじゃ全員警察署へ向かうぞ!!怪我人には手を貸せ!」

私の指示でまず警察署へ向かった。しばらくして私達の部隊は何とか警察署に着いた私達はまず怪我人の治療に当たった。

「誰かそこにある包帯取って!!」

「おい！ここにあった消毒液どこにいった！！」

「おい！ここにあった消毒液どこにいった！！」

あちこちから声が聞こえる中私は無事な隊員と一緒に警察署内に生存者が居るか捜査をしていたが中は誰もいなかった。

「大佐！！怪我人の治療完了しました！！」

「分かったわ。それじゃ全員に休む様に言って……」

「はっ！！」

そして私に報告した隊員はみんなに休む様に言うために部屋を出ていった。

「はあ……」

「どうしたんですか星井大佐？」

私がため息を吐くと後ろから私と同期仲間でこの小隊の副隊長の千鶴奈央少尉が声をかけてきた。

「いやね……、世界がこんなになってしまった理由が分かんなくて……」

「ああ成る程。でも今はそんなことを言ってる暇はないでしょ？」

「うう……確かにそうだけど……」「星井大佐！！千鶴少尉！！大変です！！」「一体どうした！」

私達が話し合っていると一人の隊員が息を切らしながら部屋に入ってきた。

「化け物共がこちらに向かってきています！！」

「何ですって！！？」

「くっ！全隊員に通達！！化け物共を迎撃！一匹も中に入れるな！！」

私はすぐに隊員に指示を出しながら迎撃をしに行った。それから5分後、現状はこっちが不離だった。

「くっ！誰か弾持ってない！！」

「くそー！来るな化け物！！」

何体か倒したが化け物共は減るところが増える一方だった。このままじゃ全員やられてしまう。一体どうするば……。

「！！隊長後ろ！！」

「えっ？……！！？」

私が考え事していると隊員の一人が私に声をあげた。後ろを振り向くとそこにはあの化け物が私のすぐそばまで迫っていた。

「キヤアアアアア！！！！」

この距離じゃ逃げる事が出来ず部下の方も援護する事が出来ない。私は悲鳴を上げ助からないと思った。

「星井大佐！！」

千鶴が私を助けようと銃を構えた瞬間。

「究極〜〜！！ゲシュペンスト〜〜！！キッ〜〜ク！！！！」

「えっ？」×全隊員

突然声が聞こえた瞬間物凄い音が聞こえ恐る恐る目を開けるとそこにいたのは赤いロボットだった。

星井サイトエンド

淳サイト

……ついノリでやってしまった（汗）。まあでもアルトは一応ゲシュペンストの改良型だから大丈夫………だよな？つとその前に。

「ええと、大丈夫ですか？」

「！？あ、ああ大丈夫だ……」

「そうですか……それじゃあここは俺達が援護しますんで後退してください」

「え？」

隊長と思われる人は訳が分からないと言った顔をするが俺は 奴らの方を向いた。

「それじゃ、行きますか！！美鈴！！敏美！！美雪！！行くぞ！！」

「「「分かった！！」」」

そして俺達は 奴ら に攻撃を開始した。

淳サイトエンド

星井サイト

「す、す……い……」

私は自分の目を疑った。突然現れた謎のロボットは上空にいる仲間と思われるロボットに指示を出しながら圧倒的力であるの化け物共を倒していった。

「た、隊長あのロボットは一体……？」

「私も知らない。一体何なの？」

すると突然、赤いロボットの肩のハッチが開いた瞬間。

「これだけのクレイモア弾、貴様に見極めるか……！」

ズドドドドドドドドドドドド……！！！！！！

そこから大量の何かを発射し化け物が一瞬で消滅した。

「スタッグビートル・クラッシャー……！！」

グワシャッ……！！

青いロボットは右手に装備されたハサミのような物で化け物を真つ二つにした。

「行つて！！チャクラム・シューター！！！」

キュイイイイー！！！！！！
ズバツ！！

黒いロボットの方は左手から何かが出てきて化け物の頭を切った。

「ハウリングランチャー、Eモード発射！！！」

ズキュキュキュキューン！！！！

ドッコーン！！！！！！

もう一体の青いロボットが大量に見えそこからビームのような物発射していた。

「一体何なの？」

「隊長！！あれを！！！」

一人の隊員の指を指す方を見るとそこには一台の装甲車がこっちに向かって来ていた。その装甲車からミサイルやレールガンと思われる物を発射し攻撃を開始していた。それから数分後化け物共は一体も居なくなった。

（あのロボットは一体何なの？とにかく助けてくれた礼ぐないしなうと……）

そう思いながら私は隊長と思われる赤いロボットの方へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2048w/>

学園黙示録と古しえの鉄の巨人

2011年10月8日17時43分発行